
魔術師組合

れもすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術師組合

【Nコード】

N7658P

【作者名】

れもすけ

【あらすじ】

魔術師組合に勤める落ちこぼれ魔術師であるネーナは、ある日ひよんなことから国家の機密である黒竜騎士の素顔を知ってしまう。罪に問わない代わりに「俺と結婚しろ」と迫られ……。のーんびり更新です。

序章

昔むかし、そのまた昔の大昔。

王国がまだバルファイという名でなかったころ。

大神バルフィクスは、いまのオタール湖の上に大神殿を構え、弟妹神とともにこの地を治めていらっしやいました。

あらゆる魔法を自在に用い、雨を降らし、あるいは日照りにし、この地に住まう人間をより善き人にしようと導かれました。

隣人への善行を尊び、悪心抱く者を決して許さぬ御心は、弟妹神にも通ずる神の掟となりました。

あるとき、大神は妹神セレスティンに、罪人に拷問をするようお命じになりました。

女神セレスティンは心優しく、兄神の厳しい裁きから、いつも目をそらしておしまいだったからです。

ところが女神はその命令にひどく怯え、大神が斬首に用いる、断罪の剣を持ってユグナール火山にお隠れになってしまいました。

断罪の剣は、ユグナール火山の溶岩を、嵐によってもたらされた雨水と、火竜の息吹で鍛えたこの世にひとつの宝剣です。女神はその貴い宝が人の命を奪うことを嫌い、またそれを振るう兄神を、恐れ多くもお嫌いになっておいででした。

やがて他の兄弟神の追っ手がかかったことに気づいた女神は、もう隠れていられないと悟り、断罪の剣でもって両目をついてしまわれました。

もう人の罪悪は見たくない、人々の罪悪を記した書物も読まずに済

むし、罪人の見た目に惑わされることなく、すべてを赦してしまえ
るとお考えになったのです。

女神の所業を知った大神は、たいそう怒り、大神殿にあった神の国
への扉から、弟妹神をつれて神の国へお帰りになつてしまわれまし
た。一人の妹神が、二目と見られぬ傷を負ったセレスティンを捨て
置くこともできず、こっそりつれていきました。

時を同じくして、女神の切り裂かれた目からこぼれた血を吸ったユ
グナール火山は乱れ、暴れ、とうとう大噴火を起こしてしまいまし
た。

噴き出した溶岩は、火山の裾野を流れ流れていまのオタール湖まで
及び、ついにそこに住む人々とともに大神殿を飲み込んでしまいま
した。

溶岩が地を溶かし、できた大穴が、オタール湖になりました。そし
て南へ南へと下った溶岩が、草原の風に遮られ、留められ、盛り上
がってできたのが、ゲティホルン山脈です。

そのとき南の平原まで飛んだ大岩のひとつが丘となり、その上に、
いまのトランティア女王国の最初の城塞が築かれました。

大神には人の女に産ませた双子の男の子がおりましたが、半分人で
は神の国へ渡れず、さりとて溶岩の熱に溶けてしまいもせず、この
世に取り残されてしまいました。

お二人は大災害の日よりずっと、そしてこれからも永久に、王国の
城の奥深く、冷えた溶岩で作った玉座についておいでになるのです。

二十四年前

女王が産気づいた——そう報せを受けた女王の夫君は、窓の外で吹き荒れる風がごうごうと喧しくて、報告の近侍の耳に顔を寄せた。「聞いていたより早いよ、無事に生まれてくるかい？」

問われた壮年の近侍はわずかに眉を寄せ、しかし強い光を浮かべた目で彼を見つめた。

「御子はお二人にございます、出産が早まるのはまああること。陛下は初産、お時間もかかりましょうし、予断は許さぬ状況にございます。しかし折よく、先ほど黒の塔よりお客様が到着され、いち早く産屋に向かわれました」

その言葉に、夫君は形よい唇を歪めた。だが何事も口にするのではなく、目的の場所へ向かう脚を速める。

すでに夜半近い時刻。要所で警備兵の姿を見かける以外、すれ違

う人もなかった。もとよりこの宮殿には、女王をはじめとする直系の王族のほかに住まう者はない。こんな嵐の夜では、彼らの親しい友人達も出向いてきてはいないだろう。

夫君は妻を思った。ともすれば平凡に見えそうな顔立ちだが、空より高い矜持と、産声を上げたその日以来、二十四年かけて培った自信に縁取られ、あふれ出す輝きが彼女を美しく彩る。あまりに細いあの身体で、男には欠片も想像できないと産婆が笑った苦しみに耐えているというのだろうか。

妻を思えば、その膨らんだ腹も思い出す。懐妊が判明したと思ったら、急激に膨れたその腹を見て、侍医は双子だといった。二人産むのは、一人産むのとなにがどれほどちがうのか、彼には見当もつかず途方に暮れた。

東のはずれに用意された産屋には、ひっきりなしに女官たちが出入りしていた。沸かした湯の桶を抱えていたり、白く清潔な布を運んでいたりと、あわただしい。夫君はそこに見知った魔術師の姿を見つけて、息を飲んだ。

知らず脚がとまり、従っていた近侍が怪訝な表情を向けてくるのがわかったが、取り繕う余裕もない。とりあえずは彼を案内するという役を終えて、壮年の近侍は一礼を残して歩み去って行った。

その部屋で愛しい妻がひとり闘っているのなら、彼も踵を返して即刻この場を離れただろう。だが一瞬の逡巡も許さぬタイミングで、魔術師がこちらに気づく。

小さな会釈とともにゆったりと歩み寄り、その魔術師は彼の前に立った。中肉中背、年齢的にも中年の域に差し掛かるうという男。背丈ならば勝っているけれど、あと他にどこでこの魔術師を上回れるか、自分でもすぐには答えられない。

二十代半ばの彼よりもはるかに精気のみなざる眼光に気圧されて、足がすくむ。

「お久しぶりです、殿下」

「……ダーレン、グラヴィール——」

名前をつぶやいたきり押し黙った彼に、魔術師は——ダーレン・グラヴィールは目を眇めて眉を上げた。言うべきことがあるだろう、といわんばかりの表情に、彼はぎりつと奥歯をかみしめた。

殿下と呼んだか。そうか。

では今ここで、彼は昔馴染の友ではない。発言になんの価値もないお飾りであっても、王婿として威厳を保つ努力をする権利はある。

「——警護の任、ご苦勞だったね。この嵐で旅程が乱れてはいけな
いと、心配したよ」

だがそのセリフは、ダーレンの中での的はずれたようだった。眇
めていた目を軽く睜り、不遜な角度まで顎の先を上げて首を振る。

「長は決して違えませぬ。今日この日と長がおっしゃられれば、御
子は必ず今日お生まれになる。そして長が取り上げられるとおっし
やったならば、我々は必ず間に合うのです」

ダーレンの声にどこか嘲弄する響きを聞き取り、彼はぐつと拳を
握った。だがそれに気づかれるのは絶対に嫌だったから、さりげな
く背後に回して隠した。

「違えない、か。君は本当に、僕を愉快的気分させる言葉をたく
さん知っている」

「魔術師を廃業したら、道化師としてお抱え下さるか」

精一杯の皮肉も、ダーレンに唇の端であしらわれた。

もしそうなったら、さぞ宮廷のおしゃべり雀達が慄くことだろう。
だがそれが実現することはありえないから、彼は顔の筋肉を総動員
して笑みをつくってみせた。

不毛な遣り取りを終わらせる決定打を脳裏に模索している最中、急に産屋から女官達が一斉に出てきた。それを不審に感じた彼は、すぐ最悪の事態に思い至って青ざめる。

「なにがあつた、陛下は？ 子どもは？」

女官のひとりの腕をつかんで問い質すと、母親ほどの年齢の女官は小さく首をかしげた。

「陛下のお客様が、残らず出て行くようにとおっしゃられて……」
長か。

思わず踏み出しかけた脚を、猛烈な意思の力でとどめる。長が出て行けといったなら、自分も中には入れない。無理をとおして行つたとて、できることなどなにもなかった。

だがここでダーレンを相手に愉快的会話を再開させるつもりもない。彼は産屋の前の壁に寄りかかり、母子ともになんの問題もないという報告だけを待つことにした。

出産は時間がかかるものだという。まして初産ならなおのこと。朝までに産まれればよいほうなのかな、と覚悟して椅子でも運ばせようかと思い始めたとき。

扉の向こうから甲高い泣き声が聞こえてきた。

「あ——」

気づけば産屋の扉に飛びついていていた。部屋の中まで飛び込まなかったことを、褒めてほしい。永劫その合わない魔術師が背後で嘲笑を浮かべているのは確実だったが、振り返って確認したいとは思わなかった。

ほどなくそつと扉が内側から開き、彼らを招き入れる声がした。震える足で静かに入室すると、分厚いカーテンで窓を覆った室内には、小さな手燭がひとつ灯るきりだった。

普段使うものとは比べ物にならないほど簡素なベッドの上で、妻

が荒い息をついて横たわっている。彼はふわふわとおぼつかない足取りで、だが素早く歩み寄った。

「お疲れ様……」

枕辺に膝をついて囁きかけると、妻は目を閉じたままうなずいた。汗ではりつく前髪をのけてやり、上気した額に口づける。首をめぐらせて赤子の姿をさがせば、産婆よろしく取り上げた長が、布の塊を抱えているのを見つけた。長の手が布をかきわけ、顔を見せてくれる。両親と同じ黒髪で、母親と同じ癖毛だった。

「ああ、元気に泣いてるね。男の子？ 女の子？」

思わず涙ぐみながら尋ねると、妻はひとつ大きく息をついて、男だといった。

では未来の国王にはまだ会えないな、と軽口を叩こうとして、はっとする。

腹にいたのは、双子だったはずだ。もうひとり――。

薄暗い部屋ではあっても、広さはない。それらしいものをさがして視線をさまよわせば、妻が気づいて指し示す。台をはずせば揺り籠になる、小さな小さなベッド。

妻の手をぐつと握ってから立ち上がり、彼は勇気を振り絞ってそこを覗いた。癖毛の赤子と同じように布にくるまれ、しかし産声をあげない赤子を見つめ、彼は青ざめた。自分と同じまっすぐな髪質をした赤子は、ベッドが大きく見えるほど小さな身体でぐつたりと横たわったきり、動く気配を見せなかった。

「お、長……！」

だが俄か産婆は、彼と反対にまったく落ち着き払って首を振った。
「眠っておるだけじゃ」

「そ、そんな！ だって産声をあげて初めて呼吸をするんだって――」

「いらぬ」

実にあっさりと断じられ、彼は妻を振り返る。妻は目を閉じて呼吸を整えるばかりで、彼の不安を払拭してはくれなかった。ふら、と影が揺れた。

顎をつかまれたように首を向けると、長が腕に抱いた赤子を捧げるようにしてみせた。それから音もなく、女王の傍らにその子を横たえる。

「十四になったら、こちらの御子を太子にされよ。ただいまより、陛下の御子はこの方お一人。そちらの」

と、長はベッドに捨て置かれた赤子にちらりと一瞥を寄越し、また妻へと視線を戻す。

「二番目に生まれ出でた身体は、ダーレン・グラヴィールに託されるがよろう」

「な——」

あげかけた抗議の声は、だが彼の妻によって遮られた。彼女は産褥についたまま、まだ火照った頬を引きつらせるようにして彼を見つめた。

「黙れ、そなたに嘴を挟む権利はない」

その凜とした、しかし君主の衣をまとった声音に圧倒され、彼は口をつぐんだ。それを見届けてから、女王は長に視線を転じた。

「長よ、それはこの子に『メイ』の称号を与えろということに相違ないか」

「いかにも」

「——よかるう。ダーレン、それを持って行け」

これには彼の我慢も限界だった。

思わずベッドの中の——彼によく似た赤子を抱き上げて叫んだ。

「ちよっと君、それって言い方はないだろう！ この子だって僕ら

の――」

「黙れ」

女王はあくまで冷静に、もう一度彼の言葉を遮る。いい加減腹に据えかねて彼女を睨むと、彼女の深い青の瞳は静かに夫の腕に抱かれた赤子を見つめていた。それは母としての愛情を確かに含んで揺れていて、不憫なこの子を自分だけでも守らねば――そう意気込んだ彼の心はしゅるしゅると萎んだ。

「殿下のお気持ちは汲もう。だがお生まれになった御子はお一人、それだけのことよ」

長の言葉に、彼はきしむ首筋を無理にめぐらせてそちらを見やる。滝のような黒髪をさらりと流し、長は扉へ向かう。

「星が必要であると告げたとき、再びお目にかかろう」

それが質問や抗議は一切受け付けないという意味の拒絶であると、そこにいる全員が察した。

そして長は、黒のローブを引きずって産屋を後にした。ダーレンが王子を彼の腕から取り上げ、おざなりな一礼をつけ加えて去って行くのを、彼はただ見送るしかなかった。

十年前

「ダーレン！ ダーレン・グラヴィール！」

回廊の先に行く後姿を見つけ、考えるよりも先に大声で呼び止めていた。訝しげな侍従をそこに留め、立ち止まった人の元へ駆け足で寄る。

背に垂らしたフードのついたローブの色は白。襟元から裾の縁を飾る金糸の縫い取りは、古語を混ぜた魔導式の文言。携えた身の丈ほどの細い杖は白磁色に輝いて、細かな黄金細工で真紅の石を留めている。

「すまないけど、ちょっと……いいかな」

探るように尋ねると、魔導士は肩をすくめて無言で了承の意を示した。久方ぶりの再会だというのに、感慨の欠片も見せない。

彼より十は上だが隙なく引き締まった体躯は決して大柄ではなく、それでいて言いようのない威圧感を全身で醸している。何年か音沙汰がなかったと思ったら、ふらっと宮廷に戻ってきた男。そのブランドを感じさせない精力的な活動で、瞬く間に国内の魔術師たちとそれから魔導士たちを――白鷹騎士団を掌握してしまった。

優秀な魔導士だと思う。それは間違いない。自分のような凡人には、到底及ばないレベルの人物だ。子どものころから、彼の背中ばかり見上げてここまでやってきたような気がする。

しかし、と、鋭い眼光に震えそうになる拳をぐっと握る。言わなければならぬことがある。彼は小さく息を飲み、以前から胸につかえていた思いを吐露した。

話を聞き終えたその魔導士が軽く身じろぎをすると、袷がずれて、淡い灰色の服が覗いた。詰襟にわずかな装飾がほどこされただけの、

型だけは他の騎士服と同じだ。

「おっしゃる意味を理解しかなますな、大公殿下」

その声は低く張りがあり、どこか嘲弄を含んでいる。上げた片眉もがっしりとした顎の角度も、これを不遜と呼ばずしてなんと呼ぼう。彼は十四年前の嵐の晩を、ふと思い出していた。

何年たつても身になじまない敬称に内心怯みつつ、それでも精一杯、自分より頭半分背の低い魔導士を見下ろす。

「だ、だから——君が私に、その、そういう態度をとるのは……本当は、陛下に特別な気持ちを抱いているから、なのだろう？　だとしたら、少しでも、そう、話し合うべきなんじゃないかと——」
つかえながら、それでも心からのいたわりをもって言葉を紡ぐ。

だが魔導士の濃い緑の瞳は、言い募るほどに温度を失っていった。そしてそこに霜が降りそうなほどの冷気を読み取るころには、彼を呼び止めたことを激しく後悔していた。

「……なるほど。シグワード大公殿下は、おしゃべり雀どもの噂話を信じられたか。私が主君に、貴方の奥方に道ならぬ恋をしているという、あれを。しかも失恋を逆恨みして、浅ましく嫌がらせをしていると」

その声に滲む不快感と怒りに、彼は気圧されて一歩後ずさった。

「ち、ちがうのかい？　でも私は他に、君から恨みを買ったような覚えは——」

「つまり私を、恠気に駆られて我を忘れる小者、とおっしゃるわけか。しかもそれをご理解なさった上で、哀れな敗者に憐憫をかけて下さる」

「ダーレン、私はなにもそんな——」

あわてて否定しかけるが、そうとられてなんら間違いのないことを口走ったのは自分だ。シグワードはまっすぐに自分を見上げる緑

の瞳から、目をそらした。視界の隅で白磁の杖にはめられた黄金の石突が、こつんと大理石の床を打つ。

「辺境の貧乏貴族の次男坊が、並み居る大諸侯の子弟を押しつけて見事王婿の座を射止められた。その首尾に遅ればせながら称賛を贈る代わりに、ただ今のお言葉は聞かなかったことにしましょう。そしてこれ以降も、聞くことはないでしょうな」

その類の言葉を陰で聞くことはあっても、ここまで露骨に侮蔑されたことはない。シグワードは表情をかえ、ダーレンを睨みつけた。

「君は私を、いや陛下を侮辱するつもりかい？」

「私は貴方がうまくやられた、と申し上げたのですよ。恨みを買ったおつもりはないのでしょうか？ 私もお売りした覚えはない」

ふつと鼻先で笑われ、腹の中に怒りが湧いた。

だが彼とどこでなにを比較しても、勝てることなど一つもない。それを忘れ、嫉妬だけが理由だろうと言い放ったのは、身の程知らずだった。片腹痛い勘違いの上に立ち、我知らず優越感に目が眩んでいた、とするならば、浅ましいのは己のほうだ。

継ぐ言葉に詰まり、的を外れとわかっていながら、彼は苦し紛れに吐き出した。

「……どれだけ空々しく聞こえても、私たちが愛し合って結ばれたことは一点の曇りもない真実なんだよ」

「ほう、殿下はいつの間に愛のなんたるかを心得られたか」

大袈裟に両腕を広げ、口の端に嘲笑を浮かべて見せたダーレンの仕草は芝居がかり、シグワードは頭に血が上るのを感じた。

しかし彼が口を開くよりも先に、ダーレンの目がずっと眇められる。緑の炎が立ち上ったように見えた。

「ではなぜ、私の内にも同じものがあるとは思われない？ 私のそ

れが、決して陛下に向かつてはいないとお気づきにならないのだ」
囁くように低められた声に、シグワードは一瞬意味を図りかねた。
そしてその言葉を飲み込んだときには、白衣の魔導士は踵を返して
立ち去りかけていた。

「ま、待つてくれ、ダーレン！ では君には、別に想う女性がある
というんだね？」

歩みを止めぬまま肩越しに向けられた緑の瞳には、隠すつもり
のない蔑みと、哀れみが浮かんでいた。

七年前

それが雲ひとつない青空の、天気の良い日だったから、そんな日
はいつも思い出す。

赤ん坊から十五歳までの子どもしかいないというのに、その孤児
院は奇妙なほど静かだった。世話係は決して声を荒らげず、いたわ
りと誠意をもつて接してくれる。だがそこにあるのは愛情から程遠
い職業意識と義務感だけだと、幼心に皆悟っていたし、互いに肩を
寄せ合っているにも孤独だった。

不自然な穏やかさで流れていく日常を壊したのは、緊迫した空気と怒鳴り声をまといやってきた男。偶然院長室で健康診断を受けていた少年は、男が飛び込んできた場面に遭遇した。

わけのわからないことを叫び散らして院長に迫る男の腕には、小さな人が抱かれていた。呆氣にとられて立ちすくむ少年はそれに気づいたとき、ひどく美しい死体だと思った。

翌日から大部屋の隅っこを定位置にしたそれは、とても可愛い女の子だった。

普段はそんなことしないけれど、人形のように静かなその子が妙に気になって、つい声をかけてしまった。

ふわふわした茶色の髪と、同じ色の大きな目。白い頬に胸がドキとした。でもその目は虚ろで、唇はぼんやりと薄く開いている。

……ちゃんと息をしているのかな。

思わず屈み込んで、口元に耳を寄せた。細くてかすかだったけれど、吐息を確かに感じる。顔を離して間近に見ると、その子は本当に等身大の人形のようなだった。

じろじろ眺め回しても、なんの反応もない。触ってみようと手を伸ばしたとき、不意に大きな目から涙が零れ落ちて、心臓がとまりそうなほど驚いた。触ろうとなんてしたからか、後ろめたい気持ちで混乱した。

女の子は動かない表情のまま、はらはらと涙を流し続ける。

——オレのものだ。

唐突に、なぜかそう思った。この子はオレのものだ、オレが面倒を見なくちゃ。十歳男子の思い込みは幼くて激しくて、でも本当に真剣だった。

その日から三年、少年は女の子を抱きしめて過ごした。

献身的に世話をするうち、音に反応するようになり、目の焦点が合うようになり、彼を見つめ返すようになり……やがて、ぎこちな

く唇の端を上曲げるようになった。程なく、彼女がとても高くやわらかい声で話すことを知った。

花が咲いて春の訪れに気づくこと。おなががいっぱいでなくても満足だと思えること。凍える夜を寄り添ってやり過ごすこと。わけもなく寂しいときは、手をつないで沈黙に身をゆだねること。

愛とか幸せとか、温もりとか、みんなその子が教えてくれた。

だから思う。

取り上げられるばかりの人生は、もうごめんだ。

少年は薄暗い路地裏にひっくり返って、建物の間から見える狭い空を睨んだ。バカみたいに澄んだ鮮やかな青、それは彼自身の瞳と同じ色。

身体を起こそうと試みれば、全身をなんだかいんな痛みがどつと突き抜けて脱力する。殴られ蹴られ、壁に叩きつけられ、腕を擦じり上げられれば、それはそうだろうと我ながら感心した。骨を折られる前に謝ってよかった、と心底思う。

でも一体、自分はなにを謝ったんだろう。

パンを盗んだことか？ だけどパン屋の親父にとつ捕まって殴られるならわかるけど、そこらのゴロつきに小突き回される謂れはない。すれ違う人たちから財布をすってたのだって、同じだ。あがり横からかつさらわれるのに、納得なんてできない。

青い空を寝転んだまま見上げて思うことは、ただひとつ。

ああ、今日もまた飯抜きか。

あらゆる痛み顔をしかめつつ身を起こし、決意したことただひとつ。

もう二度と、つかんだものは奪わせない。

現在

その部屋に主が一人でいることは、特段珍しいことではない。

近侍を控えさせるでもなく、騎士の警護もつけず、正しく腹心たる側近の姿も見当たらない。ただ天井が高く、広い部屋に置かれた特大の執務机に、気だるげな雰囲気をもとわりつかせた主だけがあった。

だがこの人が憂鬱そうにしていることは少ない、よくない兆候だ。

彼は重苦しい空気を払うように首を振り、平静を装って主の机に近づいた。そして勧められもせぬうちに、その前に置かれた長椅子に腰を下ろす。

「……来たか」

間近で見ても、主の端麗な相貌は優れない色を浮かべている。片膝を胸に引き寄せ、くつろいだ様子を演出した。

「お召しとあれば、いづどこへなりと参上しますよ？」

その軽口に、主の形よい眉が少し上がる。お愛想で応じただけだと、すぐにわかった。

しばし手元のペンをいたずらにもてあそんでから、ふっと息をつき、主は椅子から立ち上がった。君主の息子とは思えぬ碎けた服装、

手櫛を入ただけの癖の強い黒髪。

「俺が戴冠までに片づけておきたい、と思ってる仕事はいくつかある」

それが本題なのか前置きなのか、瞬時には判断しかねた。確かに抱えている案件は多いし、もう何年も前から手がけている事案もある。

「まあ、あの陛下はあと五十年くらい現役で頑張りそうだから、太子のまま終わる可能性も否定はできんがな」

自分の母親のことを話しているというのに、その顔は苦りきっている。小柄で横暴で極局地的な嵐の如き君主は、そば近くにいと迷惑な御方であるが、為政者としては特一級の腕前でもある。並み居る列強を抑えて西大陸で頭をとっているのだから、腹黒さも天下一品なのだろう。

母親を知らない彼は、主と君主の規格外ながらも腹藏ない親子の遣り取りを見るのが嫌いではなかった。立場的にそのまま自身を投影するようなことはないが、子どものころを少しだけ思い出す。もつともそのときは、彼が親のようなもので……。

「おまえの探し人が見つかった」

柄にもなく思い出に耽っていたためか、反応が遅れた。言われた言葉の意味を飲み込むのに、時間がかかったのもある。

ぎこちなく顔を上げると、いつの間にか酒瓶を手にした主が向かいの席に座っていた。蠟燭の灯りを反射する美しいカットの入ったグラスが差し出され、操られたように受け取る。

「見つかった——わけではないか」

低められた小さな声に、ぎくりと身が強張る。美しい死体だと思ったあの日の光景が甦り、不吉な感想を抱いた自分に罰が当たったのだと、わけもなく信じた。

「……まさか」

みなまで言えず絶句した彼の顔色がよほどひどかったのか、顔を上げた主は軽く目を瞠った。そしてすぐ苦笑を浮かべ、ゆるゆると首を振った。

「そうじゃない。そうじゃなくて……」

言いよどむ主の表情は、自嘲にすりかわっていた。その理由がわからず、一旦は引いた不安が舞い戻って胸が重くなる。

「はつきり言って下さい。彼女はどこにいます、無事なんですか？」

身を乗り出した拍子に、グラスがテーブルの縁にあたった。澄んだ音で我に返ったように、主はひとつ大きく息をつき、彼をまっすぐに見つめた。

「無事でいるとも、いないとも言えない。……まず、俺の話を落ち着いて聞け。十年前、彼女が孤児院に預けられ、三年後、突如おまえの前から姿を消した理由だ」

深い青の瞳が底冷えする光を浮かべ、彼は魂が縛られるのを感じた。

ちらつく雪、視界を遮る呼気の白さ。しみしみと痛むような厳しい寒さの中で、なにをわざわざ朝っぱらから外で働かなくてはいいんだ――。

今朝何度目かの身震いをしながらのしかかるような灰色の空を見上げ、ネーナは自分の腕を抱きしめるようにちぢこまる。接客の邪魔になるからと髪を結い上げたことが、心から悔やまれた。

「そろそろ開場だよ。営業、営業っ！」

その声に首だけ回して振り向くと、大テントの奥からパンパンに着膨れした中年の男がのそのそと品物をかきわけて外に出てくるどころだった。その手からもうもうと湯気を上げる熱いコーヒーが入った真鍮のカップを受け取りつつ、ネーナは口を尖らせる。

「こんな寒い新年も二日目に、客なんてほんとに来るのかよ。しかもこんな、鍋だの釜だの干草だのを買いに」

「時代はかわったんだよ、ネーナ。魔導力の使い方も使い道も多様になったいま、潜在的な市場はもっと大きいはずだ！ ただの鍋だの釜だのじゃないんだから、安心して売ってくれたまえ。その干草もね、ちゃんと東方からはるやってきた薬草だと説明しておくれよっ」

チヨビ髭の端を丸めるようにして笑った男は、組合長、とテントの奥から呼ばれて立ち去った。

「……いまだき、触媒使う魔術師なんて少数派じゃないか」

ネーナは上司であり義父である男の丸々とした後ろ姿を見送り、ため息混じりにコーヒーの湯気を吹く。遠くで小さく鐘の音が響き、休日出勤の彼女に本日の始業を告げた。

大陸の西端にあつて北は峻烈な山脈を望み、東は広大で肥沃な平野、南に穏やかな内海を擁する大国トランティア。偉大なる女王の統べる、長い歴史の証人。国の東西を貫く大交易路の出発点であり、終着点でもある王都トランティア・トリッタは、人口百六十万の巨大都市である。

多彩な人種と多様な価値観が交差するこの都には、実に多くの大陸一が存在する。

宗教施設の数、軍隊の規模、都中に張り巡らされた水路の総延長、駅馬車や郵便制度の充実でも一番といい。しかしトランティア人にあえて選べと迫ったなら、口をそろえてこう言うだろう。

ここは大陸一の魔導都市だ、と。

トランティア魔導学院——在籍する十歳から二十二歳までの学生は、およそ五千人。教授・講師・職員の総数は八百人余。その経営は学院卒業生が多数加盟する魔術師組合が行い、宮城の実に半分にあたる広さの敷地を有し、宮城よりもたくさんの建物を抱えている。巨大な講堂、巨大な図書館、そして男女それぞれの巨大な学生寮群もそこにあつた。

必要な単位を取得したらすぐ卒業してもかまわないし、専門課程に進んでもいい。在学中から軍にスカウトされる魔導士候補もいる。大抵は在籍できる二十二歳ギリギリまで学んで、卒業したら得意分野の資格をとって魔術師になる。軍属の魔導士以外を魔術師と呼び、その仕事は多岐に渡った。

黒地に金系の縫い取りが施された服を着て、ピカピカに磨いたブーツをはいて街を闊歩しているえらそうなやつがいたら、それが魔

術師だ。そして彼らが入り口の前で立ち止まり、身なりを確認してから入っていく建物があったら、それが泣く子も黙る魔術師組合なのである。

ネーナの義父が長を務め、彼女が日々勤労奉仕している場所であった。

開場の鐘とともになだれこんできた人々の中には、黒い制服姿の少年少女もちらほら見られた。休日でも学院の制服を着て歩くのは、それが彼らにとってステータスだからである。未来の魔術師らしく黒尽くめで飾りけのないデザインだが、それだけに晴れ着姿の人々の中でとても目立っていた。

彼らも何年かしたら、自分のところに薬草を煮る鍋を買いにくるにちがいない。たとえ今は目の前を素通りしていたとしても。

店先に置いた丸椅子の上で自分の膝に肘をつき、ネーナは行きかう人波を眺めていた。はるか東の空は薄日が差しているようにも見えたが、この宮城前広場には突き刺す寒さが居座っている。

「寒い……」

低いつばやきは呼気に混じって舞い上がり、背後で鍋を磨いていた同僚の耳に届いたようだ。

「え？ なにか言った、ネーナ？」

その、野太くも人のよさそうな明るい声に、ネーナは膝に肘をついたままグルンと振り返った。

「寒いよ、バニー。身も心も懷も。もっと上等なコート着てくればよかった、持っていないけど」

「もっと上等って……いま着てるので十分じゃないの」

そのあきれ声ももっともだ。ネーナがまとう黒いコートは、素人

目にも高価に映る。光沢のある布は足首まで届く長さ、首元を飾る白い毛皮は、毛足は短くとも密に生え揃って冬の風にやわやわとそよいでいる。バニーが着ている組合支給の安物とは、暖かさも値段も桁がちがう、一介の団体職員には過ぎた品だった。

「それ以上なんて言ったら、組合長が鼻血を噴くわよ。せつかく買ってくれたのに」

小さく笑って、バニーは鍋磨きの作業に戻った。ネーナが抱えたら手が届くかどうかとも怪しい直径の大鍋だが、バニーの前では小鍋に見える。やわらかな物腰と口調、優しい声で話す彼は、小山のような体躯を誇る「身体が男、心は女」の複雑な人だった。

「くれて言ったわけじゃないもん」

「あらあ、すごく喜んだくせに。そんなこというと罰が当たるわよ」
「当ててみるっつんだ」

「ごつい手で意外と繊細に隅々まで鍋を磨き上げる彼を眺めながら、ネーナが肘をついた姿勢のままカクカクと顎を動かす。

「仕事が終わったら黒山羊亭で一杯やろうよお。ていうかもう帰っちゃおうぜ、お客なんか来ないし。みんな闘技会がお目当てなんだし。ていうかわたしもそっち行きたいし」

言い終える前にバニーの向こうから咳払いが聞こえ、唇を尖らせ渋い顔の組合長が現れる。しかしネーナは動じることなく、義父の突き出たおなかを指で突ついた。

「やめなさいっ！ 行かせてあげたいんだよ、ネーナ、私だって本当は！ でもね、新年初日の朝のうちは出てきてくれる職員が少ないんだ、飲み明かしたまま来られても参っちゃうし……。それにうちは昼過ぎになると忙しくなるんだよ、魔術師どもは大抵宵っ張りだからね」

言い訳がましく釈明しながら、義父はがばつとばかりにネーナを

頭から胸に抱きこんだ。冷たくなった布地が頬に押しつけられるわ、おっさん臭いわ、丸い腹でボンボン頭が跳ねるわ、ちょっとした虐待である。

「ちょ、っお、離セッ！！」

ネーナが渾身の力で突き飛ばすと、父は鞠のように弾んでバニーの背中にぶつかった。鋼の背筋に打ちつけたらしい背をさすり、それでもにこやかに言う。

「闘技会に行きたかったらさ、せめて誠意を見せてごらんよ。パパはネーナが喜んで労働する姿が見たいなあ！　たとえばほら、バーンのように鍋を磨くとか——」

「やだもう、組合長ったら！　バニーって呼んでくださいッ」

恥じらうように身体をくねらせたバニーにさすっていた背中をどつかれ、組合長はたたらを踏んで商品の壺にしがみついた。そのままもろとも倒れそうになるのを必死でこらえ、壺の陰に隠れながら二人を睨む。

「と、とにかくそっちは裏口から入れるよう手配しておくから、休憩時間まではまじめに働いておくれよっ！」

言い放つと、組合長はそそくさとテントの奥に消えて行った。

トランティア魔術師組合といえば大陸最大の職業組合ギルドでもあるのに、その元締めときたら文字通り玉のようにコロコロとネーナたちに転がされている。

「まじめにって言われてもねえ」

鼻の頭に皺を寄せ、唇を片端だけ吊り上げてつぶやくネーナの顔は、組合長でなくとも張り倒したくなるほど憎々しい。なまじもとの造作が悪くないだけ、目も当てられないほどの凶悪さだ。

「なあに、今日はまた一段とご機嫌斜めなのね」

顔が映るほどピカピカに鍋を磨き終えたバニーが、次の獲物——

計量スプーンともいう——を手に取りながら笑った。ドワーフから仕入れたアクセサリやら、特級の認定を受けた職人の作品などは、テントの奥でケースにしまわれて組合長が見張っている。

通路際の店先に並んでいるのは、精々が物質界第一層第二位階までしか手の入れられていない安物だ。要するに表面だけちよこつと魔術で加工した、紛い物に近い。天然の魔導鉱製や、細工の法界深度の高いものは、目玉が飛び出て零れ落ちててもまだ足りないほど高価である。

もつとも、魔術師の末席、下の下の下くらいに名を連ねるネーナには、複雑怪奇で意味不明な魔導工学など、そもそもが理解の範疇のはるか先だ。

「ここんとこさあ、夢見が悪いんだよね。なんかわけわかんない、黒いような赤いようなドロドロした夢見て、夜中に飛び起きんの。寝不足だよ」

目の下の隈を指差し、見るとばかりに相棒を振り仰ぐ。仰がれたほうは、他人の分まで貼りつけたような極太眉毛を寄せた。

「あらまあ。睡眠不足はお肌の大敵よお、今夜はゆっくり眠れるようにハーブティでも飲むといいわ」

言いながら、いそいそと陳列台の上の薬草を見繕い始める。東方からはるばるやってきたという、それは立派な売り物なのだが。

ネーナは軽く息をつき、再び丸椅子の上で通りに向き直る。人の流れは会場の中央に向かっていて、今日この催事場が新製品の魔導用具展示即売会のために設けられていることを、完全に忘れていたようだった。軽く身を乗り出してみれば、ゆっくりうごめく人の頭の向こうに、屋外闘技場のそり立つ壁が望めた。

「蟻じゃないんだから、そろそろそろ行進すんじゃないっつもの」
さすがに小声で悪態をつけば、薬草を紫色の細いリボンで束ねつつバニーが応える。

「仕方ないわよお。今日の闘技会は天覧試合、陛下の名代でメイがご臨席なさるんだもの」

どこかうつとりしたその声に、ネーナはため息を返した。

トランティア女王国現在の王太子が、二十四歳になるガリオン・メイ。メイはある特定の条件を満たした太子に与えられる尊称で、様や殿下といった敬称は必要ない。

母系で継ぐトランティア王家にあつて、史上三人目の男の太子である。滅多に人前に出ないが美男子であることで有名な王子だけに、闘技会のチケットが即日完売したのも無理はなかった。

しかしだからといって、自分がいま寒さをこらえつつヒマを持て余しているのは納得できない。腹が立つほどの寒空の下、モノはいが買い手の少ない大鍋を見張る作業は果てしなくたびれる。日が暮れるまで座っていたら、尻もしびれてカチコチに凍ってしまうだろう。

「だから休日手当が高いんだな！　くそう、組合長が直々に出張るなんてきつとおもしろいことがあるにちがいないと踏んだのに」

昨年この日は、集合住宅の自分の部屋で爆睡していた覚えがある。一昨年はまだ新人だったので、仕事があることすら知らなかった。年末にあらためて同僚にどういう業務になるのかと尋ねたら、皆奇妙な笑みで「需品課の一員ならば是非その目で見ろべき素晴らしいイベントだ」という旨で口をそろえた。無垢な生贄を逃すような心ある職員が皆無だっただけのことだと気づいても、後の祭りである。

口汚くつぶやくネーナの肩に手をついて、バニーがごろごろと笑った。

「ネーナったら、おバカさんねえ。ほら、お客様第一号よ」

太くたくましい指が示す先に、茶色のコートを着た男が立っていた。テントの入り口あたりを見渡し、なにか探している様子だ。

「ふうん……ほんとにいるんだ、客」

仕方なく重い腰を上げ、ネーナは肩を回した。石像にでもなった気分だ。

男はコートと同色の鍔なし帽をかぶっていて、砂色の襟足がわずかにはみ出ている。探し物があるなら案内しなくちゃならんな、と思っで見ていると、男と目が合った。

「あ、お願いできますかあ？」

やけに間延びしたしゃべり方だ。お願いされたくはないが、拒むわけにもいくまい。それでもぎこちない営業スマイルで応じる。
「なにかお探しですか？」

お探しだから呼ばれたのはわかってはいるが、常套句だから仕方ない。ネーナの醸す白けた空気に、だが彼は気にした風でもなく、髪と同じ砂色の目を細めて微笑んだ。その眦はやや垂れ気味で、左の目尻に泣きボクロがちゃんと乗っている。

「武具の類はないですかあ？ 細工深度の高いやつがいいんですけど」

その言葉に、ネーナは思わず男の姿を上から下までまじまじと見た。

線の細い女顔、ひよろつとした体格。彼が魔術師の正装をしてもまったく似合わないだろうに、武具が必要とはさらに意外だ。

「え、つと……どれくらいですか？ その、法界深度とか、予算とか。実戦用——じゃないですよね」

壁の飾りならともかく、魔導処理された武具を実戦に用いる人種は限られる。というよりも、黒竜騎士か、白鷹騎士団の魔剣士くらいなものだろう。銀狼騎士の線もなくはないが、前の二人種と異な

りガチガチの女王信奉者かつ戦争屋である彼らが、騎士団の支給品以外を携行するという話は聞いたことがない。わざわざ自腹を切つてバカ高い武具を、しかも女王から賜るそれでは足りないといわんばかりに買い求める必要がないからだ。

ネーナがよほど怪訝な顔をしたからか、男は眦ばかりか眉尻まで下げて苦笑を浮かべた。

「いまのところ使う予定はないですけどあ、せつかくだから。法界深度は高ければ高いほど、予算はそれに応じてつてところかなあ」
なにが「せつかくだから」なのかは不明だが、客がそういうならこれ以上の詮索はできない。そもそも一定以上の細工がなされた品物は、ネーナの手に負えるものではない。

どうやら男は上客のようだと気を取り直し、ネーナはテントの中を振り返りながら答えた。

「多分、奥にあると思います。組合長がご案内するので、少々お待ちいただけますか」

だが奥の陳列台の前に丸々とした背中を確認し、首を戻すと、そこに男の姿はなかった。

「え？ あれ？」

あわててあたりを見回すが、広場に向かって進む群集の行列があるばかりだ。ネーナは啞然としてつぶやいた。

「冷やかしかよ……」

なにがしたかったんだ、あの客は。一瞬でも真面目に対応しようとした自分がバカみたいだ。

その憂さをバニーの背中を殴りつけて晴らし、両手を振り回して嫌な客だったと訴えると気が済んだ。

「第一号があれって！ ヘンな客ッ！」

「魔術師なんて、みんな大抵ヘンじゃない。さ、行きましょ」

「どこへ」

人型の小山を見上げると、それはテントに入ってくる眼鏡の青年を指差していた。薄日に淡い金髪がきらきらと光っているのが、遠目にも見てとれる。

「あれ、ジール……？ 朝、会わなかったけどな」

「いいじゃない、いま来てるんだから。彼に店番を押しつけてあったかいものでも食べましょ。それから闘技場へ行っちゃうのよ」

バニーのウインクは怪物も逃げ出しそうな迫力だったが、ネーナはとにかく腰を上げてうなずいた。

「組合長のお守りは秘書に任せろ、これ常識」

初めて聞いたがありがたい常識である。

ネーナは足音を忍ばせ——そんな必要はなかったが——そつとテントを抜け出した。

人の波に乗って流され始めたとき、背後から義父の悲しげにわめく声が聞こえた。

闘技場の前では、チケットを高値で転売する者や、温かい飲み物を売ったり買ったりする人でごった返していた。出場者の家族もいるのか、怪我をしないようにとか、もし優勝したらといった会話が切れ切れに聞こえてくる。

「裏口いこうよ、裏口。こっそり入れたらおもしろいじゃん」

「なにか食べなくていいの？」

「あとにする。バニーのオゴリで」

はぐれないように太い腕にしがみつき、ネーナは常になくはしゃいだ声で言った。

髪を結い上げて高価なコートに身を包んだネーナと、都一有名なギルドの制服をきちんと着込んでニコニコしているバニー。二人の姿は、傍目には身分違いの恋に身を投じた恋人同士に見えたかもしれない。

「バニー、いちいち雑貨屋の前でひっかかるなってば！ そんな髪飾りどこにつけんだよ、ハゲのくせに！」

「んまあ、ハゲじゃないわよ！ 短くしてるだけじゃないの、ネーナの意地悪っ」

しかしてその実体は、口の悪い娘と繊細なオカマの親友同士なのであった。

人ごみと遅々として進まぬ列に悪態をつくネーナの口に飴を放り込んで、バニーは彼女の髪をなおしてやる。栗色の巻き毛を結い上げてやったのも、眉を整えて化粧してやったのもバニーだった。

「ネーナは黙ってたなら美人なんだから、もうちょっと身なりと言葉づかいに気をつけなさいよ。さっきの髪飾りだって、あなたの薄茶

の瞳によく似合ってたわ」

「めーんどくさーい」

鼻に皺を寄せて顔をそむけ、ネーナは壁沿いにどんどん進んでいく。ぶつかったり押しのけられた人の迷惑顔にも、おかまいなしだ。やがて出場者や裏方のスタッフが出入りしている扉を見つけると、バニーの後ろに下がった。

入り口に立っている兵士の制服を見たところ、王宮から派遣された警備らしい。そちらを顎でしゃくり、相方の鼻先にびしっと人差し指を突きつけて命令する。

「ほれ、魔術師組合デスって言えよ」

「え、ええ？ それって効果あるの？ むしろ組合の名前は出すべきじゃ——」

「知ったこっちゃないよ。おなかすいてんだから早くしろ！」

「なんの関係があるのよお」

すごい顔で睨んでくるネーナと警備兵とを、おろおろしながら交互に見やっていたバニーが、あつと小さく声を上げた。

「見て、ネーナ！ どっか行っちゃった！」

見てと言っておきながら、彼は振り返る間もなくネーナを肩に担ぎ上げて走り出した。振動でこつこつの肩が腹に食い込んで吐きそうになるのをこらえ、ネーナは身をよじって進行方向を見やる。

「お、おお！ でかしたオカマ！」

「オカマって言わないでッ！」

言い終えると同時に裏口から闘技場に滑り込み、バニーは天井から下がったカーテンの間をすると移動した。ほどなく狭い廊下に行きあたり、小さな目をくりくりさせて周囲をうかがう。壁にかけられた蠟燭の明かりだけが頼りで、おそらくは出場者が控え室からアリーナに出るために使う通路だ。

「ここ、すごく入り組んでるのよねえ……メイはどちらにいらっしやるのかしら」

「高貴なお方は高い場所が好きって相場が決まってんでしょ。一番高いところきやいいじゃん」

二人の声は石壁に反射して、意外なほど大きく響く。

「私たちが行つてどうするの。おそばには近づけないんだから、お姿が拝見できる場所をさがすのよう」

「拝見とかいって、単なる盗み見じゃんよ」

バニーの肩に担がれたまま、ネーナはつぶやいた。

さっきの騒ぎで飴玉を丸々飲み込んでしまい、胸につかえている気がしてもやもやする。叩いてみても咳払いをしてみてもなおらず、いらつとした彼女はバニーの背中を力任せに殴りつけた。

「いたあいつ！　ちよつと、なにするのよおッ！」

「うるさい！　チケツト買わずに忍び込んでるんだから、静かにしろ！」

バニーよりほど声が大きいの自分なのだが、そんなことは柵の上に放り投げる。

人に見つからないようしばらくウロウロしてみたが、絶好の覗き見ポイントもなかなか見つからない。観覧席の入り口で、係員がチケツトを検めているのも一因だ。そのうち建物を揺らすほどの歓声が遠くから聞こえてきて、本日の第一試合が始まったことを知った。

「……おなかすいたなあ」

「さっきは後にするっていったくせにい」

「いまの騒ぎで急に徒労感に襲われた、そうしたらおなかすいたんだよ。バニーのせいだ。なんとかして。飴はやだよ」

頭の上からきっぱりと言い切られ、バニーはため息をついた。ネーナの大食らいは今に始まったことではないし、彼がそのわがまま

し放題を許してきたのもまた、今に始まったことではなかった。

そつとネーナを床に下ろし、バニーは支給品のコートを脱いで足元に敷いた。観覧席近くの通路は、舞台裏よりは明るくて暖かいが、それでも石畳の上には座らせられないと思ったのだろう。たとえ相手が、大食いと力持ちだけが自慢の乱暴者であったとしても。

「ここに座つてて。絶対に動かないで。おいしいものをチラつかされても、知らない人についてっちゃダメよ？」

「わたしは子どもか！」

「あら、十七は子どもよ」

岩のような顔を笑みの形に作り直して、バニーはキョロキョロしながら通路の向こうに消えた。

バニーのコートに遠慮なく腰を下ろし、ネーナは膝を抱えて小さくなった。劇的な効果はなかったが、それでも尻にわずかなぬくもりは感じる。

自分の膝に額を押しつけ、目を閉じる。うねるような歓声が大きくなり小さくなり、心地よく耳をくすぐると、空腹よりも眠気が強まったように感じた。

（眠い……昨日、遅くまで仕事してたのがいけなかったか）

昨夜は今朝に備えて——ネーナにしては珍しく酒も飲まず——家に持ち帰った書類を相手に悪戦苦闘していた。

ドワーフの王国の略史と、産出される希少魔導鉱のリストの読み込み。それらを元にして造られる各種魔導用具の発注用書類の作成。経理課が出てよこした予算と、開発課が持ってきた見積は、天と地ほどの開きがあったように思う。

暖炉の前に広げた書類を思い浮かべるが、思い出せるのは表紙とタイトルだけで、内容はさっぱりだった。あんなに読み込んだのに、何度もノートに書き取ったのに。

「……やっぱわたし、本物のバカなんだな……」
わかつちやいたけど、と盛大に息をついて顔を上げると、目の端に黒いズボンの裾が映った。

一瞬バニーかと思ったが、気配も足音もなかったことに気づいて身体が硬直する。それでもゆっくり、目玉だけ動かして脚から上の付属品を確認した。

まず剣を包んだ銀の鞘。赤い石が埋まった柄。幅広の相当な大剣だ、ネーナでもなければ持ち歩くのがやっただろう。普通なら腰に佩いて平然としていられる大きさではない。きっと魔導鉱を例の魔術でちゃちゃっと細工して、変性させたものだ。自分の給料じゃあ一年分ではきかないな、と計算してしまうのは、需品課職員の悲しい性か。

磨き上げた黒いブーツのつま先、足首まで覆うたつぷりとしたマントの表は黒、裏地は暗い赤。銀糸で大きくなにかの縫い取りがしてあるようだ。魔術師のものに似ているが、材質があきらかに異なる。その人が腰に手をあてているために肘で布地が持ち上がっているが、そうでなければ袷が深くて服まで見えなかっただろう。

それから腰丈の上着。ベルトに竜の横顔を打ち出した銀のバックル、上着のボタンはかなり大ぶりでなにか文字が彫つてある。学生時代に記号学の授業で習った気もするが、ネーナには花や星と同じような絵にしか見えない。

そして左だけつけた肩当。――竜の爪を象った。

「……ま、さか……」

そして衣装の持ち主は、頭のとっぺんから顎まで覆う黒い被り物をしていた。ネーナの角度からでは、咽喉仏しか見えない。よく見ると薄い紗を重ねたその布は、きつと内側からなら外の様子がよく窺える。

額のあたりから頭部を、複雑な曲線を描く細い銀細工の輪で囲い、被り物をとめている。少々の風では脱げたりしないだろう。

全身黒尽くめ。正体を隠すように被った布。そして片方だけの肩当。

「……黒竜、騎士——？」

初めて見た、と呆けている場合ではない。

トランティア騎士団の頂点、黒竜騎士の実態は太子の親衛隊だという。今の太子はメイを名乗るガリオン王子。今ここに黒竜騎士が現れたということは、女王の名代であるメイに随行してきたというわけで。それはすなわち、この近くにメイがいるということに他ならない。

ネーナは貧血に似た眩暈を感じつつ、視線を下げてあわてて両手を振った。

「あ、怪しい者ではございません！ ちょっと迷子になっただけで、メイを覗き見しようとかそんなことは！」

騎士は黙って、腰にあてていた手を上げて腕を組んだ。鞘が揺れて剣を吊った鎖がベルトにあたり、かすかな金属音が響く。

「の、覗こうとは、思ったりもしましたが……メイご本人にどうか、そういうわけじゃ……」

よく考えたら、まだタダ見を目論んだことがバレたわけではない。しかしそれに気づいたところで、今さら誤魔化すにも手遅れだった。「その……」

反応のない騎士に気圧され、口ごもった。遠い歓声が聞こえるたびに、なぜか絶望的な孤立感を味わう。

かすかな衣擦れの音に、ネーナは顔を上げた。

かしゃん、と銀の輪が飾りの鎖を鳴らし、黒い紗が引き下ろされ

——騎士の顔が露になる。伏せていた瞼を開け、その騎士はまっすぐにネーナを見下ろした。

若い男。おそらくネーナといくつもちがわない。

ざっくりと伸びた黒髪は、首の後ろで束ねられている。尖り気味の顎、薄い唇、高い鼻梁。それらが形作る顔立ちは端整だが、なにより夏の空みたい澄んだ明るい青の瞳に、ネーナは呼吸をするのも忘れた。

こんなに明るい青、見たことがない。

「あ……の……」

放心したまま、口が勝手に言葉を吐き出そうとする。すると騎士は眉を上げ、人の悪そうな笑みを浮かべた。

「なんだ、見惚れたか？」

はつきりとからかう低い声に、ネーナは我に返った。

「ち、ちがう、びっくりしただけです！ 黒竜騎士が顔を見せるだなんて——」

今度は自分の発言に驚いて、言葉を飲み込んだ。

そうだ、黒竜騎士は主の前以外では絶対に顔を見せないはずだ。

顔どころか、全身をマントで覆い、身体つきすらわからなくしている。そしてたとえ宰相閣下に求められても、決して一言も発さないと聞く。徹底して個人を特定させないのだ。

「……見せるだなんて？」

騎士の口元には余裕ありげな笑みが浮いたまま、眇められた目は明らかにネーナの様子を観察している。わかっているのに、釈明の言葉ひとつ出てこなかった。

高みから見下ろされることにも威圧されるが、空色の目にまっすぐ射抜かれて、文字通り床に礫にされているような心地になる。し

かもその目はお世辞にも笑っているとはいえなかった。

「——ごめんなさい。そんなにメイのおそばに近づいてると思つてなくて」

ネーナが目をそらしてうつむくと、さっきより金属音が大きく聞こえて、彼が自分の前に片膝をついたのがわかった。

「そんな、この世の終わりみたいな顔をしないでくれよ。メイは試合をご覧になっておいでだ、近くはないさ」

一転、優しい声とともに差し出された手を、まさか断れるはずもない。渋々として立ち上がり、バニーのコートを拾い上げる。すると騎士はそれを指差して、なぜか不快げに言った。

「随分デカいな。話し声がしたのは……彼氏か？」

「は？ いえ、これは友達のです」

あんな岩の怪物みたいなオカマがカレシだなんて、いまこの状況よりもありえない。

バニーのコートをたたもうとして、ネーナは気づいた。

炎をバツクに、二本の杖をぶつちがいにした紋章——胸に大きく、魔術師組合のワッペンが輝いていることに。

「あつ！！ あの！ しよ、処罰されるんですか？ どこに出頭したらいいんでしょう、騎士団の詰所ですか？」

背後に隠すには巨大すぎる布の塊を床に投げ捨て、ブーツのつま先で横に押しやる。

だが要人警護のプロに、稚拙な誤魔化しはきかなかったようである。

おそるおそる見上げると、騎士はその端整な顔から表情を消して細く長い指を顎にあてた。

「おまえのトモダチ、魔術師組合？」

「はあ。いや——友達がつていうか、その、わたしもつていうか……」

しどろもどろで答えると、今度は頭のとっぺんからつま先まで、責めるように眺めてくる。その遠慮も容赦もない視線に気圧されながらもまだ、顎を上げてそれに耐えるだけの根性はあった。

（くそう、なんでこんなことに……ボスの呪いか？ いや、ジールの野郎だ！ 前から怪しいと思ってたんだ、あの陰険眼鏡め！ 鍋の見張り番を放棄したくらいで、これだから根暗なガリ勉はいやなんだよつ。上昇志向のエリートなんか大っ嫌いだ！）

歯を食いしばって平静を装うその内側が、かなり支離滅裂になっていると本人は気づいていない。

いけすかない組合長秘書の首を絞める妄想に浸っているうちに、騎士はなんらかの結論に達したようである。

「もしかして、おまえ——」

つぶやいたきり、騎士は難しい顔で何事か考え込み、やがて首をかしげるようにしてネーナの顔をのぞきこんだ。

「メイに、会いにきたのか？」

「はえ？」

思わず間抜けな声で聞き返したとき、騎士の背後から野太い悲鳴が響いてネーナの鼓膜を突き刺した。

「きやああああ！ ネーナになにをするの、痴漢！ 強制猥褻で訴えてやる——ッ！」

床を鳴らして突進してくる怒れる小山。ぶちあたったら昇天できる勢いのそれを、ネーナを抱えて軽くかわした騎士は声を上げて笑った。

「痴漢に間違われたのは初めてだ」

「図々しいわねッ！ ネーナを放しなさいったら、この——」

猛牛のごとく見事なターンで振り返って正面から騎士の姿をとらえた岩石魔人は、おもしろいくらい顔色をなくして小さな目をいっぱいに見開いた。

「あ、あなたは——」

そして喜劇の大道具かと思うほどしゅーっと小さくなって、冷たい石の床に座り込んだ。

「うそ、だって、そんな……」

「あんた、早とちりの天才だよ、バニー」

自分たちがチケットなしで裏口から忍び込んだことを忘れて、メイの親衛隊を痴漢呼ばわりしたのだ。処分どころの話で済みそうにもなかった。

「仕事クビかな……もしかして牢屋に入るのかな……」

知らずつぶやいた言葉に反応したのか、バニーは心持ち立ち直った様子でネーナを見上げた。

「だ、だだ、だってだってネーナにキスしてるように見えたんだものっ！ 泣かないでよ、ネーナ！ 牢屋だってどこでだってが私が守ってあげるからあ！」

「おまえは男用の監獄に行け！！ あほか！」

「ひどーおいしいッ！」

大きな石に窪みをつけて埋め込んだような小さな目からぼろぼろと涙をこぼし、バニーがネーナの腰にすがりついて泣く。その頭を抱えながら、泣きたいのはこっちだ、と思ったとき。

「確かに、メイの暗殺を謀った咎で罰することもできそうだな。俺が個人的に名誉毀損で訴えるのもかまわんが、公務中の黒竜騎士の素顔を見たから反逆罪でもいいな」

（顔！？ 顔なんてあんた、勝手に見せやがったくせに——）

その場違いに愉しげな声に猛烈に腹が立ち、ネーナは騎士をぎっ

と睨みつけた。

「お好きになさればいい！ でもこのオカマはちがう、わたしが忍び込むよう命令したんです。こいつはわたしに逆らえないから。それと、組合も無関係です。勤務中に不謹慎なことをしたのは確かですけど」

しかしネーナより頭一つ以上背が高い騎士は、彼女が睨んだくらいでは怯む様子もない。

「メイがご臨席される試合の会場に制服で忍び込んで、無関係ね。魔術師組合から、騎士団への挑発行為と受け取ってもかまわないぜ？」

返す言葉がなかった。

「うつうつ、いやよネーナ……まだ離れたくないわよう」

おいおいと声を上げて泣く親友の頭を抱え、短く刈り込んだ硬い焦げ茶色の髪をなでながら、ネーナは唇をかんだ。かみやぶってしまう寸前、冷たい指が頬に触れる。顔を上げると、あの青い瞳がネーナの目を覗き込んでいた。

「全部、見なかったことにしてやってもいい。——そのかわり」

「そのかわり……？」

途方に暮れる思いで力なく見つめ返すと、騎士は端整な顔を傾けてネーナの耳に低い声で囁きかける。

「結婚しないか、俺と」

「え——？」

だが続く台詞は響き渡るひととき大きな歓声に大半がかき消され、ネーナにこれは夢なんだと思わせた。

冬の休暇も明けて初日の朝、ネーナ・ヴァス需品課課長補佐は組合の通常業務に戻るべく元氣いっぱい通勤途上にあつた。

丘の上に建つ宮城の白い輝きを正面に、石畳の大路をひたすら歩く。弱々しくとも確かな陽光が東の空から差し込んで、キンと冷たく澄んだ空気にやわらかな匂いを含ませた。湯屋から落とされた湯が運河に流れ込んで、川幅いっぱいにあたたく白い煙を噴き上げる光景もこの季節ならではの。

早朝のこの時間、都を放射状に走る大路は馬車の車列でちよつとした混雑を見せる。

彫刻や垂れ飾りと家紋入りのプレートで派手に主張する車体は女王宮へ参内する貴族、地味を装った高級素材の車体は商人を乗せている。宮城内の官舎でもなく、二番街の豪邸街に住むでもない中級軍人は、馬車でなく馬に乗って混雑に拍車をかけていた。

それを横目に歩道を闊歩するネーナの服装は、白いブラウスにハイウエストの黒いスカート、黒い腰丈の上着と、組合の制服でフル装備だ。襟元に締める赤いリボンは職場のロッカーに突っ込んである。義父のくれた高級コートのおかげで魔術師組合の職員であることが隠され、通行人から余計な憧憬の視線を向けられないですむのがいい。

それでも栗色の長い髪をなびかせ、足取りも軽く歩むネーナは人目を引いた。しかしいまは朝食に食べたペストリーの味を思い出して陶然としていたので、本人がそれに気づくこともない。

三番街の職場を目指して歩いていると、四番街の街門を越えたあ

たりで後ろから声をかけられた。

「おい」

という遠慮も愛想もまるでないその声には、覚えがあるなどというものではない。ネーナは渋々立ち止まり、襟の毛皮に頬を埋めるようにして振り返る。

果たしてそこには、親愛なる組合長秘書の姿があった。

「……おはよ」

口の中から消え去ったペストリーの味を惜しみながらも、朝の対面にふさわしい挨拶を述べる。落ちこぼれとはいえれっきとした社会人であるからには、好かない男にも挨拶くらいはするのである。

ジールはわずかな光でも吸収してキラキラと輝く淡い金髪を揺らし、ネーナの前に立って眼鏡の縁を押し上げた。冬の空気にも負けないくらい、冷たい表情のまま。

「新年最初の仕事から職務放棄とはいいい度胸だ。服務規定違反で減給されたいか」

いきなりかよ、とネーナは唇の端で舌打ちした。悪夢と化した即売会の昨日、異常事態に巻き込まれたまま会場をばつくれたから、彼に面と向かうのはこれが新年一発目だ。なんかもつと言うことあるだろ、と思いつつ、ネーナは歩き出した。

「あんたパパの秘書だろ、給与査定も仕事のうちかよ。それとも隠れ監査のバイトでもしてるわけ」

「朝っぱらから可愛くないことを。やらんぞ」

意味不明な言葉に訝しく思っただけ顔を上げると、ジールは眼鏡に触れていた手の中に小さな紙包みを握っていた。見覚えのあるそれに、ネーナは口いっぱいに唾液があふれるのを感じた。

「やだなあ、ちょっとした社交辞令じゃないか。よこせこらっ」

満面の笑みで瞳を輝かせ、ネーナはジールの手から包みを奪おう

と跳び上がる。だがそれほど背の高くないジールが相手とはいえ、手を掲げられてしまうと、同じく背の高くないネーナには届かない。

「埋め合わせは？」

「は？」

ジールの胸倉をつかんでぴょんぴょん跳ねながら、精一杯手を伸ばす。彼はその手を頭の上で捕まえて、ぐいと顔を近づけてきた。

「おまえの代わりにこの俺が撤収まで働いたんだぞ。無事に休日手当てがほしかったら、感謝を示してほしいものだ」

楕円の眼鏡の奥に青緑色の瞳を覗き込み、ネーナは鼻に皺を寄せて顔をしかめた。

「アリガトウゴザイマス。はい感謝した、それよこせ！」

胸倉からはなした手で、紙包みを奪い取る。逆の手はつかまれたままだったので、歯を使って紙をやぶいた。その若い娘にあるまじき粗野な仕草にジールはため息をついたが、ネーナはおかまいなしで包みの中からこぼれたものに歓声を上げる。

ネーナの口でちょうど二口ほどの大きさ、薄い生地にはジャムを挟んで焼いたパイ。仕事がある日はこうして毎朝ジールがくれる、ネーナの好物だ。休暇中はもちろん会わなかったので、実に十日ぶりの味だった。

「久しぶりいッ！　いったきまーす！」

恥じらいもなく大口開けてかぶりつくネーナを、ジールがつかないで手で引っ張った。ふ、と長く吐き出された白い息に彼を見上げると、その横顔は微笑んで見えた。錯覚か、と目を瞬いているネーナに気づく様子もなく、ジールは正面を向いたまま規則正しく歩いている。

目に優しくないキラキラの金髪と青緑色の瞳。北方の大国ダリト

ス出身の特徴も顕著なこの男は、真っ黒なインバネスの襟を飾る炎と杖の紋章で、隣に並べさせつかく一般市民にまぎれたネーナをも目立たせる。まあ本人がそこそ綺麗な顔をしているのも一因、ということも認めないではない。あの国の人間は、大抵が細面でバランスのよい顔立ちなのだ。

ダリトス人の割には中背だ、バニーのほうがよくぽどそれっぽい、と頭の中で相棒を金髪碧眼にしてみても、あまりの似合わなさに吐き気を覚えた。

脳内の口直しに二つ目を要求する手を突き出せば、無言でそれに応じてくれる。いつかジールのポケットを引っくり返してあさってみよう、とネーナは心に決めていた。一体いくつ菓子の包みを仕込んでいるのだろうか。

だが二つ目も飲み込んでから尋ねたのは、別のことだった。

「ねえ、これどこで売ってんの？ いい加減教えてよ」

「俺の縄張りを荒らされたくないから秘密だ」

毎度お決まりの回答に、ネーナはぶうとふくれた。

ジールがくれるおめざは決して珍しいものではないが、ネーナの知る限り最も美味だ。パイもジャムも絶品なのだから、きっと他の菓子も美味いにちがいない。しかしジールは絶対に店の場所を教えてくれないのである。

「ケチな男は嫌われるよ」

仕返しに自慢の怪力で手を握りしめてやったが、ジールは眉一つ動かさない。かわりに空いた手を伸ばしてネーナの頬に触れ、口元の菓子屑を払ってくれた。

「女ウケを狙うなら、まずおまえにやらない」

「あっそ」

ネーナはおとなしく菓子屑を払われながら、ブーツの踵でジールの脛を蹴飛ばした。

この眼鏡の悪魔とは、二年前、組合に就職したときからのつきあいだ。幼い頃世話になった孤児院を経営する貴族の後見は、魔導学院の卒業とともに打ち切られ、成人前だったネーナには新たな身元引受人が必要になった。そのとき養子縁組を申し出てくれたのが、組合長だった。

あまりに悲惨な成績を残して学院からとんずらしたネーナを哀れに思ったか、それともこんなイキモノを卒業生として社会に放つことを不名誉だと思ったか。学院総長でもある義父の立場を考えれば、後者であることは確実だろう。

とにかくも戸籍上の親となったチヨビ髭親爺にくつついていたのが、このジール・バルツァーという秘書だ。正式な組合職員である総務課の秘書とはちがい、彼は個人契約によって昼夜を問わず常に組合長の傍らにいる。必然的に、ネーナと過ごす時間も多くなるというわけだ。特に一人暮らしを始めた一年前からは、四番街の入り口で合流して一緒に出勤するのが日課になっていた。

握ったジールの手の中に指先を丸め込み、そのあたたかさにはほつとする。寝不足気味で頭はぼんやりするし身体は火照っているのだが、ネーナは指先が異常に冷たい。寒いのも大嫌いだ。ジールのことは別に好きでもなんでもない、というか天敵とすら思うけれど、この時期だけは手をつなぐ相手がいるのは悪くなかった。

「ねえ、昨日って売り上げどんくらい？」

ガラガラと騒がしく車輪を鳴らす馬車に負けじと声を張る。ジールは少し考えて、顎先を長い指でつまんだ。

「需品課の年間総売上の約三割」

「げっ、マジ？」

頭の中で咄嗟に鍋何個分だろうと考えそうになり、やめた。組合

で扱う需品の多くは組合員への貸与品だし、売るとなったらそれこそスプーン一本から給料何年分もの魔導具まで種類は豊富だ。

「うちの売上なんて一定してないじゃないか」

二年間しか在籍していなくともそれくらいはわかる。ネーナはなんの参考にもならない引き合いにむつとした。

ジールはくす、と知覚のぎりぎりがかすかに笑っただけ。

後は会話もなく、ただ歩いて職場へと向かう道のり。だがネーナは、この時間が決して嫌いではないのだった。

需品課本来の仕事は、組合員に貸し出す備品の在庫調整や新製品の査定、買い付けといった、主に魔導具そのものの管理全般である。就職後しばらく、倉庫の中で自慢の腕力をもって奮闘した結果、ネーナは若くして課長補佐に抜擢された。半年前のことだった。

魔導具の中には、それ一つで城が建つほど値が張るものもある。そういう代物をじかに管理する需品課長ともなれば、宮城に出入りすることも可能だ。その補佐をするとなったら、特級魔導具などのお宝に触れて眼福にあずかることもあるう。

大食いと怪力だけが取柄の自分が、学院の筆記試験の開始直前には教授たちに必ず「落ち着いて、問題をよく読みなさい」と念を押され続けた自分が、成績評定表には常に「評価不能」と書かれ続けた自分がまさか——と感激に打ち震えたのも束の間。待っていたのは特級魔道具ではなく、サイン待ちの紙の山だった。

ネーナは両手を腰にあて、むんとうなってデスクの上を睥睨する。山積みの書類は年末から少しもかわることなく——いやむしろその高さを増して彼女を待ち受け、サンプルにと組合員がもってくる匙やら金槌やら使途不明な小物やらのおかげで、デスク周りで荒物屋が開けそうな勢いである。快適な勤務環境とはいいがたい。

しかも先ほどから、ランチを終えて戻ってみたら忽然と姿を消していたペンとインクを探しているのだが、残念なことにこの偽荒物屋の品揃えにはないようだ。大方それを持ったままどこかに置き忘れてきたのだが、己の行動を遡って省みられるようならば、いまごろもっとマシな人生を送っているにちがいない。

「……バニー、ペン貸して」

書類とガラクタの河を越えた隣のデスクに向かい、せつせと新たな書類を生産している同僚に声をかけるが、彼は下を向いたままひらひらと手を振った。

「またなくしたのお？ いやあよう。さっき庶務からもらつてきたばかりなのに、ネーナが使うと半日で軸から壊れちゃうもの」

「なんだとお！？ いいからよこせ、バカマ！ 壊れたら作ればいいだろうが！ 広場で鳩でも捕まえろ！」

「ね、ネーナったら凶暴だわ……しかもいまどき羽根ペンって……」

怯えて潤む小さな目を見ないようにして巨大な手からペンをひつたくり、インクもないことを思い出して無言のままバニーのものを分捕る。

「今日中にこの山を半分に減らす。そして黒山羊亭でおいしいものを食べて飲んで帰る」

「素敵な計画だけど、ちょっと無謀だと思うわぁ。その山、この半年ほど高くなったり低くなったり、ちょびつと動いてるだけよぉ？」

「シメられたいなら、はつきりそう言え」

地の底から響くような声ですぐむと、バニーは首を振りながら小さくなった。

「そんなに怒ったらお肌にわる——ごめんなさい」

いらぬ一言を地獄の門番みたいな視線に遮られ、小山の化身が顔をそむける。

山の上から書類を取り上げて広げ、関連資料を背後の棚から引張り出す。垂れてきて邪魔な長い巻き毛は、床に落ちていた麻紐を拾い上げて適当にくくった。キラキラフリフリ好きな同僚が、哀れむような非難するような眼で見ているのがわかったが、完全無視。

サインするだけで済むようなものを優先して片づけ始めたところ

に、新たな書類が積まれる。芽生えた殺意を飲み込んで顔を上げると、ジールが眼鏡越しに自分を見下ろしていた。

「……なんだ、ジールか。不景気なツラでここに現れんなんて、いっつも言ってんじゃん。土気ってヤツがガタ落ちすんだよ」

「八番街東の人形師から、魔導力増幅装置の改良用治験データが届いた。若干サンプル数が少ないようなんだが、認可できるかどうか検証してくれ」

目元に垂れる淡い金色の前髪の隙間から、青緑色の瞳が心持ち眦められているのが覗けた。朝の出勤途中はともかく——薄焼きパイに罪はない——、人の話を聞かず早口で自分の用件を突きつけてくるこの秘書モードのジールが、ネーナは嫌いだった。

「いますぐう？ わたしがあ？」

「無論」

きらつと眼鏡の縁を光らせての間髪入れぬ返答に、ネーナは再び膨らんだ殺意をため息とともに吐き出す。

「すぐは無理だよ。生体魔導学の研究用じゃなく、普通の人形用の装置だろ？ そんな急がんでも」

「この人形師のパトロンは流行り物好きのダイン伯だ、早く商品化できれば相当な数が出るだろう。それにこの分野の研究はうちが他国に先んじている、一歩でも前に進むことに吝かでない。うまくすれば軍の需品にも食い込める」

「……儲け第一の非人道主義者め」

恨みがましい声を承諾ととらえたか、秘書は満足げにうなずく。軍人のような身のこなしで踵を返しざま、片眉を上げてネーナを流し見てから需品課を後にした。いまさら即売会で仕事を押しつけた意趣返しか、と一瞬うがった考えが頭をよぎる。

すらりとした後姿がドアの向こうに消えるのをなんとなく見送って、ふとデスクに目を戻すと、山の上に小さな紙袋が置いてあるの

を見つけた。飾り気のない生成りの袋を何気なく手にとって振つてみると、かさついた音と甘い匂いが香って、中身がクッキーだと察知した。

慌てて袋の口を広げると、勢いあまってビリビリと破れ、狐色の菓子が次々とこぼれ出る。一体どこに持っていていつの間に置いて行ったのか、それはジールの差し入れだった。

おめざは毎朝だが、彼はたまにこうして、気づかぬうちに菓子やらパンやらをネーナのデスクに置いて行くのだ。礼を言うことはないが、言われない様子でもないから気にしない。遠慮せず、赤い木の実があしらわれたクッキーにかじりついた。デスクワークは腹が減る。昼に食堂の日替わり定食を大盛りで二人前食べたのとはまた話が別だ。

奥歯でばりばりと咀嚼しながら、二枚目のクッキーを唇にはさんで立ち上がる。広げたばかりの資料をたたんで、それをしまいつつ指定された治験のデータを探す。

魔導力増幅装置——それは小さな器械と魔法界第一層第一位階、つまり法界の最表層とをリンクして魔導力を高速循環させることで半永久的に駆動するユニット。初期型が、魔術師が魔法界に流した魔導力を、増幅させて器械に戻す構造だったため、現在も便宜上そう呼ばれている。

詳細は開発者の秘匿特権で保護。ただ素材がある特殊な天然魔導鉱の核に近い部分であることと、加工にも安定にも高度な魔導工学と魔導具を用いる超高級品であることは有名だ。

三年前にこれができてから、人形師の階級はドカンと上がった。体内に埋め込むだけで、人形が命を吹き込まれたかの如くひとりで動くようになったからだ。その行動は、魔術師があらかじめ組む魔導式次第でいくらかでも自由に決められる。装置のロックが開発者

の記名に呼応して解除される仕組みなので、模造品が出回る懸念もない。

三十年前を最後に、戦渦から遠ざかった大国、トランティア女王国。終戦当時、日常を取り戻そうとするように人々は躍起になって文学や芸術、建築や美食といった中に娯楽を求め始めた。結果、現在のトランティアは「西大陸の華」とも呼ばれる絢爛で豪華な文化を享受している。

この平和なご時世にあつてヒマもカネも持て余すトランティア貴族の間で、いま最も流行しているのが、魔術師組合認定印の入った装置を組み込んだ人形集めなのである。魔術師のような知識や魔導力がなくとも、それらしい気分が味わえる、というのが売りだ。

そのうち人間じゃなく人形がお屋敷を占拠するぜ、と鼻を鳴らしながら、ネーナはその光景を思い浮かべて悦に入った。人形一体で自分の年給など軽くとんでいくことに、なにか思うところがあるわけではない。

「人形、ねえ……」

キャビネットに突っ込まれたファイルの背を指でたどりながら、小さく疑念を噛み砕く。

実のところ、これを作ったのは人形師ではないだろうとネーナは踏んでいる。

随分長いこと操り人形から糸を省いたような代物しか作れなかったヤツらに、なぜ突然こんな高等魔導学を応用した装置を作り出せるというのだ。どれだけ隠れ忍んで研究したら、こうまで唐突に、しかも完成度の高い製品を持つてこられる。またこれだけ独創性と意外性に富んだ研究をするのに、どこに隠れ忍ぶ必要があるのかわからない。結果を見てもまだわからないという魔導工学の専門家がほとんどなのに、課程だけを盗み見て模倣できるわけがないのだ。

でもだれが開発しようと、ネーナの知ったことでもなかった。
申請したヤツの勝ち、売り出したヤツの儲け。それが生き馬の目を抜く魔導具開発の世界だ。

「うーん、どこだ。どこだどこだ……」

めちやめちやにファイルが詰まった棚をあさりながら、歌うようにつぶやいた。

治験データの検証には、厳密なルールがある。そんなものをいちいち覚えちゃいけないネーナが手順を書き記したファイルを引きずり出したところで、再びデスクに新たな書類が置かれる気配がした。

ネーナはクツキーを飲み込みつつ、振り向きもせず言った。

「なんだか知らないけどすぐは無理だからね！」

「だが俺のためなら、手を空けてくれるだろう？」

鼓膜を揺らす低い声に、足のつま先から頭のとっぺんまで痺れるような寒気が走り、束ねた髪が顔をはたく勢いで振り返る。口の端から、クツキーの欠片が飛んだ。

紙の山の向こう側で薄く微笑みを浮かべていたのは、濃灰色の詰襟の上に紺色のマントを羽織った、あの騎士であった。

「ファイス……スタイクス、様」

悪夢のようにうめいたのはバーニだ。名を呼ばれた騎士はにっこりと魔王の笑みを惜しげもなく披露し、ネーナに向かって手を差し伸べた。

「組合長から書類を預かったから、ついでに届けた。さ、行こうぜ」
また書類かよ、と言うべきなのか。あんたに持ってこさせたのか、
と言うべきなのか。はたまた、行こうぜってどこにだよ！ と叫んでみるべきなのか。

悩んでいる間に彼はついと歩み寄ってネーナの手から紙の束を取り上げると、それを後ろも見ずに肩越しでバニーに放って、おもむるに肩を抱き寄せてきた。ガラクタの大河は、長い脚で一跨ぎだった。

「ボスは快くおまえを貸し出して下さった。遠慮なく行つてこいしさ」

目の前に突き出された紙きれに目をやると、それは備品の貸出申請書。品目の欄にはネーナの姓名、期間は本日ただ今より——無期限。認証印は、見まごうかたなき組合長のものである。

「わたしはモノか！ 無期限ってどういうことだよ、ムチャにもほどがあるだろ！ そもそも、なんで職場にあんたが現れるのか理解に苦しむッ」

「待ち合わせの約束をしたらどう？ でもおまえは現れそうになかったからさ」

凶星である。

確かにネーナは今日、急用ができるか腹を下すかして、約束の場所に行かなくなる予定だった。

「そ……だからって——」

黒竜騎士サマが。わざわざ。街中に。魔術師のギルドに。一般市民を迎えに？

言いたいことをすべて飲み下して、かわりに巨大なため息を吐き出した。

静まり返った需品課、みなが口をあけて注目しているのが見なくてもわかる。

略装で所属が知れないとはいえ帯剣した騎士の装いで、しかも若い男が、よりによって魔術師としての賢さも女としての色気も、人としての魅力も壊滅したネーナの肩を抱いているのである。彼らもまた、一体どこからつつこめばいいのか悩んでいるのだろう。

だれとも目をあわさないようにしながら歩き出し、ネーナは寝不足の頭がきりりと痛むのを感じた。

トランティア魔術師組合本部の館は、それはそれは大きな建物だ。まず魔導学院と同じ敷地にあつて、一部の機能を共有しているためでもあるが、加盟している組合員が膨大な数であることも一因である。ひっきりなしに魔術師どもが出入りして、彼らを伝手に上等多も下等も問わず商人たちが群がってくる。商売に関係なく、日々の不便を解消したい一般市民もやってくる。応接室だけで五十からあるのだから、全体の部屋数は推して知るべし。

実用に耐えない程度の魔導力しかなくても、魔導学院を卒業して資格を得ていれば、釘しか打てない鍛冶屋だつて魔術師組合に加盟できるのである。都のギルド連合の格付でも、魔術師組合は次点の「東トリツタ商業会」を抑えてぶつちぎりの第一位、大職業組合として君臨している。ちなみに「東トリツタ商業会」は王府御用達武器商人のギルドだ。

（あんな鍋……たかが銀製の、デカいだけが取柄の鍋のせいでは……）
即売会を抜け出してひどい目にあつたのは己れのせいなのだが、ネーナは鍋を憎むことに決めたのである。需品の仕事で一番多く扱うのがそのためか、鍋と接する機会が料理人の次に多い職場であった。

高い天井の薄暗い廊下を歩きながら、まくりあげた上着の袖をなおす。髪の毛の麻紐はさすがにあんまりだな、と思い、それもほどこいてポケットにつっこんだ。

「十七歳だそうだな。……随分、大人っぽい」
肩に置かれていた手を慎重にどけながら、ネーナは不機嫌に答え

た。

「ちょっと、背後を歩かないくださいよ。老けて見えるのが悩みなんですから、若い娘に無神経なこと言わないでください」

「年にそぐわぬ色気がある、という意味だ」

「そんなたわ言をほざく奇特な人間、あんただけです」

「おまえの唯一の男になれるなら光荣だ」

「いちいち妙な言い回しをすんなよ！ 離せッ」

「おおせのままに？」

手をどけるかわりにネーナの耳のあたりにキスをして、ファイスはにっと笑った。

「ちよつ、あんた騎士のくせになんてことすんですか！」

「いいねえ、新鮮な反応だ」

からかわれている。どう返せば反撃になるのか見当もつかないネーナは、言いたいことを色々とこらえて顔をそむけた。歩む脚が速くなる。ところがストライドでファイスにかなわないため、置き去りにするのは難しそうだった。

「需品課ってことは、宮城に納品で出入りするだろ？」

「わたしはそんなにえらくないので、行ったことないです。課長と組合長の仕事です。だから黒竜騎士様はおるか、赤豹^{せきひょう}騎士様にだってお会いしたことはございません」

「へえ、それはそれでレアだな。やつらは宮城前広場にだって出沒するぜ」

用がないから行かねえんだよ！ と怒鳴りたいのを我慢して、黙々と歩を進めた。

トランティア騎士団には階級がある。他国の騎士団とちがい、ここでは完全分業制になっているからだ。貴族の末席に叙せられることもない、国でなく王家に属する純粋な女王の私兵なのだ。

まず太子の親衛隊である黒竜騎士団。

魔導士を加えて魔剣士が代表し、非常時には国王軍と行動を共にする白鷹騎士団。

主に国境の七つの大砦を護る銀狼騎士団。

王族の身边と宮城の警護を取り仕切り、王府の高官・大貴族が遠出する際には護衛を務める赤豹騎士団。

そして女王直轄地、トランティア・トリッタの治安維持を任務とする金獅子騎士団。

彼らを束ねる名目上の親分は王婿である大公殿下だが、実権はメイと騎士団総長の手にあるらしい。らしいというのは、ネーナにはまったく興味のかけらすら持ち合わせがないので、騎士団の仕組みやら指揮系統やらの知識がないからだ。

ネーナが都の往来で平素見かけるのは、獅子の横顔を打ち出した金色の胸当てと赤いマントで、衒いもなく激しく自己主張する金獅子騎士くらいなものだ。存在を見せつけることで不屈き者への牽制になるという、いわゆる示威的な効果があるらしい。それとて三日に一度と見るものではない。

本当なら、黒竜騎士なんぞ王族の結婚パレードでも見物に行かなければ、一生目に見ることなく済んでしまう超絶エリート様なのである。

それが昼日中、職場に現れた上にうすら寒い廊下を連れ立って歩く羽目になろうとは。

苦虫を噛み潰したような顔で受付の前を通り過ぎるとき、頬を紅潮させた受付嬢たちが甲高く上擦った声で「またお越しく下さい」と声をかけるのが聞こえた。彼女たちの視線は自分の頭の上を通過して、黒髪の騎士に釘付けた。

フェイスはなにも言わなかったが、優しげな笑みを返しただけで、

受付嬢をやっつけてしまった。

「さすが、黒竜騎士サマ」

腰砕けになった彼女たちをあきれ半分に見やりつつそう言つと、彼は巨大なドアの真鍮のハンドルに手をかけながら、ネーナを自分のマントにくるんで引き寄せた。

「黒竜騎士だからじゃない、俺だからだ」

「なッ、なにすんだ、このエロナル騎士！」

思わず叫んでから口をおさえたが、フェイスは気にしたふうもなく大声で笑った。

「おまえは口が悪いな」

石畳の通りに出ると冷たい風がひゅつと吹き過ぎて頬を刺し、身がすくんだ。だが一瞬覚悟した、失敗したと思つほどのダメージはない。

（あ、コート――）

部屋の入り口にかけたまま忘れてきた。

首元まですっぽりと包んだ紺色のマントを見下ろし、フェイスの顔を見上げる。斜め下から見上げてても文句ない顔立ちの男は、ひとつの動揺も、まして自分の気遣いを殊更に主張する様子もなく前を見ていた。

なるほど、要人と接することに慣れているというのは、そういうことなのか。

しかし礼を言うのもおかしいし、さりとて脛でも蹴飛ばすのにもなにかちがう。ネーナは複雑な心境のまま、表で待っていた馬車まで運ばれて行ったのであった。

二頭立てのその馬車は、装飾を抑えた質素なものだったが、細部の作りが職人技だなと知らず感心させられた。あらゆるものを鑑定して値段をつけたくなる、これも職業病であろうか。

先に乗り込んだファイスがずっと手を差し伸べてくれて、思わずつかんでしまった。やわらかな手触りのビロード張りの椅子に腰をおろすと、膝掛けをそっとかけてくれる。

有無をいわさぬ早業でありながら、不快ではない。人に気を遣わせない間というか、そのさりげなささはさすがプロだった。

王宮に住まう三人の王女たちも、こんなふうに接してもらおうのだろうか。ふとそんなことを思ってから、自分で打ち消した。黒竜騎士は太子の親衛隊、他の王族は赤豹騎士の担当だ。

「あ、ありがとう……」

可能な限り壁際に寄ってファイスから離れつつ、つぶやく。すると彼はまたしてもマントごとネーナを抱き寄せた。長い脚を組んで、壁際を幸いと密着する。

「だからってなんなんですか、くつつくなよ！」

「天下の黒竜騎士だって寒いときや寒いんだ、黙って発熱してろ」

「あんた、若い娘さんに向かってなんて言い草ですか」

「おまえこそ、騎士に向かって大概無礼な口の利き方だぞ」

相手の言葉は聞こえないふりで、窓の外を見る。少なくとも背中が暖かいことは確かだったからだ。ファイスの意図に気づきかけて、ネーナは首を振った。

小さく身震いするように揺れてから、馬車はゆっくりと動き出す。見慣れた風景のはずなのに、徒歩通勤の彼女に目線の高い馬車からの街並みは、まるで別の国にでも訪れたような気分にさせた。

自分のアパートは五番街、そこそこの中流住宅街にある。組合があるのは三番街で、ここは様々な職業組合の本部が林立するギルド街と、官庁の出先機関が立ち並ぶお役所街に分かれている。王族や大貴族、豪商、軍幹部の邸宅が建ち並ぶ二番、一番街を抜けて小高い丘の上で白い城壁を光らせているのが、女王陛下のおわす宮城であつた。

吐息で曇るガラスを指先で拭きながら、水路を行き交う小舟の列を眺める。高い岸壁に日差しは遮られ、日陰はさぞかし寒いだろうに、すれちがうたびに船頭たちは笑顔で声をかけあっていた。乗客も互いに会釈したり手を振ったり、時折すれちがいざまに果物を交換する姿も見られた。

この都にいくら魔術師が掃いて捨てるほどいようが、組合が大陸一デカかろうが、魔導力と関わりなく暮らしている人のほうがはるかに多い。自分の仕事など無関係に過ぎていく日常の、なんと微笑ましく美しいことが。

そこでは初級魔道式も組めないのかとバカにされることも、並列法界の規則性を説明できなくて悔しい思いをすることも——それでも魔術師かと、蔑みと嘲りを向けられることも、ない。

なんだか鼻の奥がつんと痛くなって、ネーナは目を閉じた。同時に、なにかが頭の上と腹のあたりでもぞもぞ動く感覚に眉をひそめる。

「——あんたほんと、なにしてんだって言ってますよ！」

「あ、起きてた」

「起きてるよ、髪に鼻をつっこむな！ 腹をまさぐるんじゃない！ 本物の痴漢行為で訴えてやるから覚悟しとけよってんですよ！」
「いいじゃないか、減るもんじゃないし。男所帯で暮らしていると、こういう匂いに飢えるんだよ」

「ああ、そっかあ……。って、いいわけあるか！ なんも減らんでもストレスが増えるわ！」

上着の中から大きな手を引っこ抜き、ネーナは騎士の腹をド突いた。まったくダメージを受けていなさそうなのが、その笑顔から察せられてまた悔しい。

「まさか王宮って、あんたみたいな工口騎士ばっか集めてんじゃないだろうな。世の乙女の夢と希望を奪いたくなきゃ、あんたは道端で口を開くんじゃない」

「お、ついに本格的に敬語放棄か。黒竜はメイの直轄だから下手すれば不敬罪だが、安心しろ、俺のオンナだと言えば放免される」

「あんたが黙ってれば罪にもならんわ」

冷たく言い捨てて、再び窓の外を見やる。ファイスがその肩に顎をのせてきたが、不毛な争いも敬語とともに放棄した。

「やわらかい髪だ。バルファイ人は髪質がいいって本当なんだな」

ファイスの香水なのか、ほのかにオレンジのような香りを感じつつ、騎士を横目に見やる。

「なにそれ、わたしをバルファイ人だって言ってるの？」

それは山脈を挟んでトランティアと北の国境を接する、政情不安が続く国だ。歴史だけはとんでもなく古く、かつては聖魔法王国と呼ばれて大陸中から崇敬を集めたものだが、現在は戦争好きで無慈悲な王の君臨する不穏な国である。神話とお伽噺の宝庫でもあった。思わず聞き返すと、ファイスは小さく顎を引くようにうなずいた。

「その栗色の髪と薄茶の瞳はバルファイのものだ。親父は教えてくれなかったのか？」

親父というのは、組合長のことだろう。需品課に現れるまでの会談で、ボスからネーナの出自や家庭の事情について聞き出したのだろうか。

「親父っていつても、学院を卒業しちゃって行き場がなかったから引き取ってくれただけだし。子供の頃の記憶がないから、孤児院の記録以上のことはボスだって知らないんですよ」

「おまえのいた孤児院って、九番街西のセズ教神殿にくっついてるところだろ？ あそこはカーロ子爵が経営してる、孤児院の中でもかなりリッチでいいところだぜ」

みなしごの住処に、リッチもいいところもあるものか。さめた気分で膝に肘をつき、組んだ手に顎をのせる。

「バルファイは長く内戦が続いているから、親を亡くした子供が大勢トランティアに流れてきている。セズ教はとくに子供への援助に熱心だからな」

「だからって、それだけでわたしがバルファイ人だと？ あっちは文化も公用語もちがうじゃないか。ちよっと記憶がなくなつて、言葉で苦労した覚えはないけど？」

「そうか。じゃあ両親がバルファイ出身なのかもしれないな」

軽く頷いて返事のかわりとし、ネーナは話を打ち切った。血統的なことはどうでもいい、トランティアの民だということを否定されそうな気がして怖かった。

出自の話になると、どうしようもない不安が胸のあたりをざわつかせる。

ネーナには十年より前の記憶がまったくない。七歳の誕生日を超えたことだけは孤児院に預けたという人が伝えていたから、かろうじて十七歳と称している。

思い出せる最初の光景は、孤児院でだれかに抱きしめられて、ごめん、ごめんと謝られているところだった。それは悲しげに、もしかしたら泣きながら。男の人だったようにも思っけれど、そこで過ぎた三年間の記憶すら定かではなかった。

優しくしてくれた子がいたような気もする、かいがいしく世話をしてもらったかもしれない。でもそれは、少なくとも自身の体験と表現するにはあまりに薄い感覚だった。

それが原因なのか、単に生まれつきの愚か者なのか、ネーナは物覚えがたいへん悪い。見聞きしたことが、虫食いのように記憶から消えていってしまうのだ。学生時代もとても苦労したのだが、大

きく食われてしまえば一回の講義について丸々全部、小さければ年号や人名などといったふうに記憶が欠落する。もちろん、人の顔も例にもれない。

学院を卒業要件ギリギリの五年で無理やり卒業したのは、それ以上いても試験や人づきあいで消耗するだけだと思ったからである。当時の後见人だったカーロ子爵が、今後のためにとコネで入れてくれたことには感謝してもしきれない。おかげでまっとうな職に就くことができているからだ。ただ、国中から数々の試験をパスしてやってくるエリート達に囲まれての生活は、つらいことのほうが多かった。

『美人だけどバカで大食い』

周囲はそう陰口を叩いてネーナを嘲笑ったものである。

口が悪いのも態度が大きいのも、悲惨な幼少期を涙をこらえて生きてきた彼女が築いた、自分を守るための壁なのである。それももはや素というか地というか、すっかりネーナの本性として同化してしまったが。

（ま、努力も忍耐も柄じゃないし）

こんな自分じゃ、きつとまともな結婚相手だって現れはしない。だったら無駄に飾ったり気を遣うより、思うように生きて、一生書類と鍋に囲まれて暮らすほうが健全ではないか。

鍋——その単語につられるように、岩山の如き親友の顔が頭に浮かんだ。

二年前、組合に就職した日からあたりまえのように仲良くしてくれた、あの心優しいフシギな生き物。思い出すのはいつも、恐ろしい顔をくしゃっと歪めて——それはおそらく微笑んでいるのだろうけれど——巨大な手に不似合いなほど小さな、可愛い飴玉を載せて差し出すところだった。

結婚なんかできなくなつて、バニーがいればそれでいい。彼と過ぐすくつろいだ自分を想像するだけで、胸がじわつと温かくなつた。たとえば生まれ変わつても、彼と結婚しようとは思わないが。

ふと気づけば、自分の肩に頭を乗せて居眠りし始めた騎士が窓ガラスに映っている。

ネーナのような一般市民でさえ、黒竜騎士が絶対に人前で被り物をとらないことを知っている。無理に剥がせば反逆罪だ。だからこそ、今日は全騎士団に共通の略装で現れたのだらう。だがどうしてあのか、彼がなんの前触れもなくそれをとつて素顔を曝したのか、ネーナにはわからなかった。

「ネーナに一目惚れしちゃったんじゃない？　それでそれで、ちゃんと顔を見たかつたとか、ちゃんと顔を見せたかつたとかっ！」

とは、恐慌状態から立ち直つた岩石魔人の頭に花が咲いた妄想だ。もちろん黙殺した。

「……………」

自分の相棒と同じ生物にくるのが申し訳ないほど端正な顔立ち、恵まれたスタイル。魔術師ごとき足元にも及ばぬ、真に選ばれし者。白鷹・黒竜騎士の採用あるいは昇級試験に合格するのは、魔導学院で主席を取るより難しいといわれている。とりわけ黒竜騎士といえば、仕事柄語学や各国の宮廷作法、宗教学、もちろん武術、そして最も重要な騎竜術の達人でなければならぬ。一般庶民は竜自体、間近で見る機会など生涯ないものだというのが、この間に。

様々なものを兼ね備えて、一生に一度の試験に一発で合格しなければ、その栄誉ある制服に袖を通すことはできないのである。

ただ、ネーナには背後の騎士に絶対に勝っていると胸を張れることがあつた。

「それは貞操観念だ！　寝たフリこいてんじゃないねえ！　胸をさわる

な、このエロ騎士！」

ブラウス越しに触れた大きな手を振り払いつつの渾身の肘鉄はあっさりよけられ、さらに怒りが倍増する。

「次にさわったらブツ殺す！」

「おまえ、着やせするほうな。夏が楽しみだ」

「……頼むから、お願いだから話くらいは聞いてよう」

情けない声で思わず懇願したとき、馬車が大きく揺れてとまった。

半ベソで窓の外を見やると、御者が番兵になにか書類を渡しているのが目に入った。街門で身分をチェックされているようである。

「もう一番街なんだ……馬車って速い」

トランティア・トリツタは宮城のある丘を基点に、最初の街壁までが一番街、その外が二番街といった具合に、一番外側の十六番街まですべて壁で区切られている城塞都市だ。番号の若い街区から歴史が古く、人口増加に伴って城壁を新たに築いた結果である。

二番街までは街門が閉められる時刻まで通過が自由だが、一番街、すなわち王侯貴族の邸宅が建ち並ぶ地域は、出入りの際必ず身分検めが要求されるのだ。

しかしそこを抜けた後は、王宮の裏門も咎められることなく抜けて馬車は進む。やがてとまったのは、宮城の東側、組合のある地域からでは見えないエリア。

本日、本来の待ち合わせ場所——目通りを許すと無理やりネーナを呼びつけた、ファイスのご主人様がお住まいの場所だった。

お城っていったって、ただ地所が広いだけのお屋敷群だろ？

なんて思っていたのが大間違いだった。

現在宮城のある丘は、もともと建国当初そこだけが国であり街であつた。ネーナのあやふやな記憶が確かなら、三番街くらいまで広げたところで完全に王家のものとして独立したのだ。

宮城を囲む城壁を越え、さらに直系の王族が住まう宮殿が建ち並ぶ区域に入ると、そこは議会も法律も完全に手が出せない私有地だ。税金で修繕や増改築が行えない代わりに、なににどれだけ費用をかけても、それが国王の財である限りだれも口出しできない。

裏門から入った馬車は、公地を抜けていわゆる太子宮の敷地へ進んだ。諸官庁や軍本部、女王が政務を執る王府のある女王宮は、城の正門を抜けた正面から東西に広がっている。太子宮はそのさらに東側から北の一角を占めているらしい。

車輪の音を響かせながら、馬車は心細いほどひたすらに森の中の小路を進んだ。やがてたどり着いた場所で馬車を下ろされたネーナは、ファイスに背中を押されるようにして促されつつ、冬でも枯れぬ鬱蒼とした森に建つ館を、あんぐりと口を開けて見上げた。

「これ……ここで、メイがお仕事されてるわけ？」

そのあまりの驚きぶりに目を細めて笑いながら、ファイスは首を振る。

「ここは私的な館だ。他にあと三棟、用途によって使い分けておられる。国政に関わる執務は女王宮でなされるからな」

そしてさらに目を丸くする。

なにしろその一棟だけで、学院の巨大学生寮二つ分はありそうな

のだ。おまけにいつの時代のどこの国の様式だか知らないが、屋根から壁から柱から、どの部分を見ても細かく美しい装飾が施されている。それでいて決して華美ではない。

「え？　なんだって？　これを四棟も使ってるって？　それはどこにあるんだ、この森はどんだけ広いんだ、これって庭だろ？」

だれともなくつぶやいたとき、ファイスが身長のはある巨大な扉を開いて、建物の内側へ彼女を押しやった。

その広大な玄関ホールから幅広い螺旋階段を抜け、目的の場所へたどり着くまでに受け続けた衝撃を、ネーナは生涯忘れることはないだろう。しかし思い出したくなることもないと断言できる。

（ただの廊下が、こんなに広くて豪華である必要があるのか？　くそう、税金で建ててないから文句も言えないじゃないか。これだから王侯貴族サマは！）

つましく生きる労働者魂がやり場のない怒りに席卷されているうちに、ネーナはいつの間にか屋敷の主に対面していた。

「メイ、ネーナ・ヴァス嬢を借りてきましたよ」

ドアを開けて入室してからそう告げるあたり、この騎士の立ち位置をうかがわせる。人の顔を覚える能力は融解しているネーナだが、力関係を察知する動物的な勘でその欠点を補完している。

廊下の次は部屋の天井の高さに圧倒されていたが、ファイスの言いようは頭の隅にカチンと引っかかった。さつきからモノではないのだ、借りてきたとは何事——と口を開きかけて、今度こそ頭が白くなった。

ご立派なエロ騎士様は、いまなんと言った。

「っお、ちょちょちよ待つてよ！　心の準備つてもんが——」

入り口で脚を突っ張るネーナの抵抗を、ファイスはそれはそれは楽しげに笑って無視した。

「ネーナ、ガリオン・メイだ」

無理やりお姫様のように手をとられ、部屋の中央に進み出る。分厚い雲の隙間からにわかに差したガラス越しの陽光に照らされ、その人は振り返った。

首筋を覆うように、無造作に伸ばされた癖のあるつややかな黒髪、強い光を浮かべる深い青の瞳。高い鼻梁からバランスよく配置された形よい唇。規格外に大きな執務机の脇にすっきりと立った長身、白いズボンに包まれた長い脚。

——二万人収容の闘技場での試合、そのチケットを即日完売にさせた美貌がこれか。この大国トランティアにおいて、三番目に高貴な御方の姿がこれか。いま最も結婚したい男・恋人にしたい男ランキングで、六年連続一位を獲得した本人がこれか——。

感激や驚きよりも、ネーナはどうやってたらあの岩のオバケと同じ製造過程を経て、こんなにも美しい造形物が仕上がるのかと、創造主を問い詰めたい気持ちに駆られた。

が、表面上はもてる精神力のすべてを使って背を伸ばし、床すれすれまで片膝を折って深く頭を下げる。

「ネーナ・ヴァスにございます。本日は——」

いいお日中で、と言いかけたところで、いきなりうつむけた顎をつかまれ、すれすれだった膝が床につく。傾いだ身体を支えようと咄嗟に出した手は、その人にさらわれた。

「メイ！」

あわてたようなファイスの声が、どこか遠くで聞こえる。強引に顔を上げられて見つめた先には、『黒の太子』と渾名される人の、恐ろしいほど澄んだ双眸が待ち受けて——。

「……なるほど、よくわかった」

口の端を吊り上げるようにして笑い、メイは顎をつかむ手を離し

た。ネーナの肘を支えて立ち上がらせると、貴族の令嬢に向けるような完璧な礼をとってみせる。

「非礼を赦されよ、ネーナ・ヴァス嬢。腹心の部下が心奪われた美貌を是非にも拝見せねばと、気が逸った」

その美しい所作と張りのある低い声にうつとりしかけたネーナだったが、はたと我に返った。

「ふ、腹心の部下がどなたかは存じませんが、それは事実誤認です！」

メイの型破りな行いのおかげでかえって自分を取り戻し、鼻息も荒く言い切る。横目でエロ騎士を見上げると、彼は大道芸でも見るような目で笑っていた。視線を戻せば、メイも同じ表情を浮かべているのに気づいてカッとなる。

王族ごときに負けていいのか、伊達にバカじゃないところを見せてやれ！ という不可解かつ場違いな心の声に、ネーナはあっさり屈して口を開いた。

「あらためまして。魔術師組合のネーナ・ヴァスにございます。王太子殿下におかれましては、ご尊顔の麗しくてあらせられるを日々城下にてうかがい、臣民として大変誇りに思っております。あ、直々のお召しと聞いて、天地がひっくり返るほどに動転しておりますので、多少のご無礼はお許しくださいませ」

そして今度こそ最敬礼をとって立ち上がり、まっすぐに顔を上げた。

仮にも『メイ』をわざわざ王太子殿下と呼んで、ハンサムだけが売りらしいと言つてのける。バーンが見たら泡を噴いて倒れそうなほどの不敬に、ネーナは鼻を鳴らしてやりたい気分だった。

闘技場の件といい、強引に呼びつけたことといい、含むところは色々あるのだ。その上いきなり乙女の顎を無許可でひっつかみやが

った王子サマには、この程度の礼儀を守ることすら腹立たしい。

さあどうする、打ち首か？ 島流しか？ 鞭はひどく痛むし痕が残るっていうからいつそ殺せ、とネーナが唾を飲み込んだとき、意外にもメイはにと口角を上げて笑った。

「いい度胸だな。さすが、初対面で怪しい男の求婚を受けただけのことはある」

「そ、その言い方は語弊がありますね！」

ファイスを振り仰ぐと、彼はさっと顔をそむける。つやつやに光る靴のつま先を踏んづけてやりたいと思いつつ、ネーナはメイに向き直った。

「わたしと同僚を見逃してくださったことには、心から感謝してます。今日はその、条件についての詳しいお話を聞けると思ってたんですけど」

決して美男子と噂のあなたの顔を見にきたわけではないですよ、という意思表示は宣戦布告の如き迫力に満ちている。その条件とやらについての説明を受けなければ、この消化不良のような不快感も取り除けない。

ところが珍しくまじめに問題と向き合うネーナを横に、身分の高い男二人はお気楽な様子で笑いあう。

「フラれたぜ、ファイス。黒竜騎士一の色男も、大したことないな」

「これくらいの方が、攻略のし甲斐があるってものですよ」

「おい、エロ騎士！ 黙って聞いてりゃあ、ひとをなんだと思ってるんだよ！ バカでも薄給でも日々健気に生きてる一般庶民だぞ！」

言い終える前に、すでに後悔している。この口は一度バニーにつねってもらったほうがよさそうだ。原型を留められるかどうかは、甚だ疑問だが。

しかしこの王子サマも常識にとられない方なのか、少しも動揺することなく二人に執務机の前に置かれた長椅子を勧めた。立ち居

振舞いの見惚れるほど綺麗なことは、この際認めても負けではなからう。

二人が腰を落ち着けると同時にワゴンが運ばれてきて、隙のない所作で侍女がお茶を淹れてくれた。うちの受付嬢も完敗だな、とその表情のない美しい横顔に感嘆する。二人分の茶器と巨大な皿に盛りつけた焼き菓子を並べていく間、物音一つ立てなかった。

折れそうなほど細い持ち手に怯みつつ、ネーナはカップを取り上げて口をつけた。いつもの勢いでつかんだら、間違いなく粉碎してしまう代物だ。

「さて、せっかくわざわざお運びいただいたんだ。早速本題に入ろう」

侍女が退出すると同時に、机に腰かけた格好でメイが腕を組む。確かに生きた彫像のように整った姿だが、なんだかもう見慣れてしまった自分も乙女としてどうなのだろうか。

だがどうせ、この顔を記憶しておけるかどうかだって、脳内に棲む小人さんの匙加減だ。

「そのエロ騎士は、どうせ大まかな話しかしなかったんだろ」

「詳細に教えようと思ったら、逃げられました」

自分でも認めてるのかよ、と心の中でだけつつこんでおき、二度と触れたくないほど繊細なカップを皿に戻す。昨日、エロ騎士の話に適当に聞き流し、今日の約束だけしてとっとと家に帰ったのは自分だ。動揺していたのもあるが、どうせジールもいるし、これ幸いとおもしろくない職務を放棄した感はない。

「便宜上の結婚をするって——法的に有効な婚姻証明書が必要だ、とだけ、聞きましたよ。ダラハーガにある塔の門番に見せるために」
ネーナの言葉に頷いて、メイは身を乗り出すように彼女に顔を向けた。

「早急に、賢者に宛てた書簡を届けてもらいたい。極秘文書だから、ファイスに直接持たせたいんだが」

「どこの塔も魔術師以外、立入禁止ですからねえ」

トランティア南部の辺境にある、通称『黒の塔』は魔術師の聖地である。であるがなぜか、魔導学の神と呼ばれる長は不老不死なのだとか、怪物を作る実験をしているとか、希少種である竜を人工繁殖させて荒稼ぎしているだとか、笑い話のような噂が耐えない謎の場所でもある。

一般に魔術師の塔といえば、魔術師を育成・支援するための機関。しかし黒の塔は、魔導学院の設立とともにその機能を完全に移管し、治外法権の魔導学研究施設へと役割をかえたといわれている。律法や王権ですら介入不能、ある種聖域じみた存在感が、荒唐無稽な噂を生み出す所以かもしれない。

だが今回指定されたのは、黒の塔ではなかった。

大陸西端、トランティア女王国最大の港湾都市ダラハーガにある塔。史上最年少にして賢者の称号を賜った、魔導工学でその道を究める魔術師が拠点とする場所である。

「まあ、組合の職員はなんらかの魔術資格を持ってるから、そういう意味では間違いなく魔術師ですけど……。いつもはどうしてるんですか？ お役人とか、白鷹騎士サマとかが行くんじゃないんですかね」

大皿に山盛りになった焼き菓子を熱心に見つめながら、ネーナはそう水を向けた。

さつきから膝のあたりで宙をさまようネーナの指先に気づいていたのか、メイが皿を押し出してくれながら頷く。

「厳密に俺の手駒と呼べるのは、騎士団の中じゃ黒竜だけだ。今回はどうしてもこいつらを使いたい事情がある。ちなみに白鷹騎士だ

が、平和な場所に奴らの仕事はない。食い扶持稼ぎに、北の国境までお出かけた」

北？

ネーナは遠慮なく小ぶりのリーフパイをつまみ上げた格好で、停止した。

山をはさんだ向こう側に、バルファイ軍が駐留している、という噂は聞いたことがある。だがもう十年もそれきり動く気配がない、というのもセツトで聞かされた。すぐそばには大砦があるから、牽制なら常駐する銀狼騎士団で間に合っているはずなのに、白鷹騎士団を応援に出すほど国境周辺は緊迫しているのだろうか――。

だからいまこそ、魔導用具の研究開発と顧客の新規開拓がどうのと、そういうえばボスが口角泡を飛ばして熱弁を振るっていたような気がする。

どこいらへんがいまこそやら。

頭の隅っこでチョビ髭を震わせて力説する義父の顔を排除しつつ、メイを見上げた。黒の太子は眉を上げ、ネーナの理解の度合いを測るような目をした。

つまんだきり忘れていたパイの存在を思い出し、ネーナはメイを見つめたままそれを口に放り込んだ。次の瞬間、噛み砕く歯の先端から広がる味にくわっと目を見開く。

「はああ！？ うまい！」

ジールのパイも真つ青だ、いやタメ線か？ いずれにせよ、宫廷パティシエ恐るべし！

「よかったな、残ったら持って帰れ。魔導士や魔剣士に興味があるなら、黒の塔に寄り道してきてもかまわんど。長に紹介状も書いてやる」

「残んなかったらお土産はなしか……」

「おまえ、引つかかるところはそこかよ。ていうか全部食う気が」
話の進行を見守っていたファイスが、笑いを含んだ声をかけてくる。しかしネーナの興味は、一切そちらに向くことはなかった。

「魔剣士って、それもまたレアですね。実在したんだ」

「数が少ない上にサイクルが短いからな、魔導士より見る機会はないだろう」

「はあ、サイクル……。魔剣士っていうと——魔導力学、いや法界魔導学？ 詳しくないんで、よくわかりませんけど。なんかもう、金獅子騎士サマがすげー普通に思えてきました」

あのド派手な騎士達は、おそらく元々自己顕示欲の強い若者の集団なのだろう。金色の鎧に包まれた胸を張り、真っ赤なマントをかけた肩をそびやかして通りを闊歩する姿を脳裏に描き、なんとなく納得する。

きつと一般市民の前で美々しい己を見せびらかしていれば満足なのだ。上に行くほどの才覚がなくとも、それを悔しいと思うことはなさそうだった。

残念なことに、ネーナの中では金と赤の塊としか思い起こせないのだが。

しばし頷きながら菓子を減らすことに専念し、ふと顎を上げる。

「しかしまあ……王族の方や騎士サマでも門前払いとは、塔の石頭っぷりも半端ないっすね。エライ人たちも、敷地のはずれくらいまで出てきてくれりゃあいいのに」

「おまえ、長か賢者に会ったことは？」

眉を上げておもしろそうにするメイに、ネーナはあきれ顔を見せた。

「あるわけないじゃないですか、雲の上の人ですよ？ 実はとつくに死んでるとか、ほんとは存在しないとかって言われても驚きません」

自分も同じ業界に身を置くくせに、茶菓子に手を伸ばすネーナの口調は他人事だ。しかもそれ以上に雲の上の人を目の前にしている事実も忘れている。さすがに苦笑を浮かべつつ、メイは組んでいた腕をほどいて机の端をつかむ。

「最近はやわらかくなったほうさ。組合に加盟する魔術師の三親等以内の親族、もしくは配偶者であればお供を許すそうだからな」

「ところが伝書鳩には、適当な親族も嫁もいなかったと」

口に入れた分を咀嚼しつつ、次の菓子を物色するネーナ。鳩呼ばわりされたフェイスが、指の背で唇の端についた菓子屑を払ってくれる。そうされることに慣れっこなネーナは、特に反応を示すこともなかった。

「そこにタイミングよく、おまえの登場だ。義理とはいえ親父は実質、この国の魔術師たちの総元締め。事情を明らかにしても害はないし、娘の戸籍を貸すくらいお安い御用だそうだ」

「なにい！ あのかそ親父、ひとの人生を安く見積もって売りやがったな！」

いかに高く見積もっても、常人よりはるかに安い値しかつきそうにはない、という自覚があることは黙っておく。

「騎士団の詰所に身柄を引き出しに行くよりは、騎士と結婚するほうがよっぽど外聞がいいと思うぞ」

フェイスの声に滲んだ甘い響きを感知して、ネーナは逃げるように尻の位置を動かす。

「書類上の結婚でしょ？ 籍を抜いたら、未婚扱いにしてくれるって話じゃん。ほんとの結婚じゃないんだし、周りに公表はしないよ」

「さあ、どうだろうなあ。お使いだつて一度だけとは限らないし？」

「だったらお断りだ、だれが黒竜騎士なんかと延々結婚してられるかってーの！ つーか大体、あんたが黒竜騎士だなんてだれにも言えないじゃないかバカらしい」

「おまえ、ここは夢のような玉の輿に乗れるって喜ぶところだぞ」
「うなされるような夢の輿なんぞ、受付のねーちゃんたちに九割引で譲ってやるわ!」

「一割はマージンかよ……」

そこでついに、メイが声を上げて笑い出した。

はっと我に返ったネーナは、腹立ちまぎれにファイスの膝を思い切り引っぱたいてから咳払いする。目に涙を浮かべて笑いをおさめた高貴な男を、唇を尖らせて睨んだ。

「おもしろいな、おまえは。それと知って黒竜騎士を全否定した女は史上初だろうよ」

「お褒めにあずかり恐悦至極。今後もたゆまぬ努力を続ける所存ですよ」

全否定されたほうは、半目でネーナを見やって小さくつぶやいた。
「かわいそうに、あいつは長い監獄生活を乗り切れるのかな。薄情な友達を持つと、いらん苦労をするもんだ」

それが心優しきオカマ、またの名を岩石オバケ、そして通称をバーン・エストファンという自分の親友を指していると気づいた瞬間、立ち上がって騎士の胸倉をつかみ上げていた。自慢の怪力をもって全力で締め上げたため、さすがのファイスの顔も苦悶に歪む。

「友情を質に取るなんぞ、騎士サマも随分と上品なマネしやがるじゃないですか」

「おまえのためなら、親でも売ろう」

「聞いちゃいないっつ。わざわざ木の股を買う物好きがいるかよ」
「俺は魔物より優しくしてやるよ? 昼も夜も、夢の中でも」

苦しげに眉を寄せながら、それでもファイスの鮮やかな青の瞳は力を失わない。ネーナは生まれてこの方一度も見たことのない色を浮かべた瞳を間近に見つめ、口説き文句を垂れ流され、知らず襟首を絞める力をゆるめた。その隙を逃さず、ファイスは腰に手を回し

て抱きしめてくる。その顔は胸元に埋まった。

「大食いの割に細いが、食べごろではあるな」

「わっ、ちょ、はなせ！ やめろったらッ！」

体勢を保つために彼の肩に手をつき、思い切り突っ張ると、組合一と評判の腕力のおかげか、身体を引き離すことに成功する。

そのまま脱兎の勢いでメイの陰に隠れると、フェイスが小さく舌打ちするのが聞こえた。

「メイ、それは俺ですよ。さわってもいいけど、かじらないで返してください」

思わず目を上げると、メイは腕の下を覗くようにしてネーナを見下ろしている。眇められた目、唇の端を吊り上げるような微笑み。

「どうかな。初めて見るタイプだ、預かったらただで返せそうにな
い」

「う……っ」

そのぎよつとするほど甘い声音に、絶句する自分のなんと情けないことか。

いまさらながら、恋愛も火遊びも経験なし、受け流す度胸と根性すら皆無であることを思い知らされる。

この空気をどう処理すればいいのか皆目見当もつかず、ネーナはとりあえず工口騎士の顔面に拳をくれて、その場をやりすごした。

室内が薄暗くなる前に、侍女たちが手燭を持って明かりを灯しにやってきた。それを潮に、帰りの馬車を手配するためファイスが席をはずし、メイは待つてましたとばかりに一枚の紙切れを持ってネーナに見せ、署名欄を指差した。

「本人のサインが必要だ。人妻になる覚悟は？」

ひとの悪い笑みに、ネーナは頬を引きつらせた。そんなものあるわけないが、その紙――婚姻申請書にサインをしたら、実態はどうであれ確かに他人の妻にはなってしまう。空欄の横には、既にファイス・スタイクスの署名がなされていた。

「えーあー……はい」

がつくりうなだれたネーナに、メイはくすつと笑った。そして机の上からペンとインクを持ってきて、紙切れと並べてテーブルに置いた。

（おシゴトだ、おシゴト。別に一緒に住むわけでも、イロイロしなきやいけないわけでもないんだから！）

心の中でシゴトシゴトと呪文のように唱えながら、ふるえる手で水晶の軸のペンを取り上げる。小鳥と木の実が描かれた陶製のインク瓶に先を突っ込み、思い切って一息に署名した。煩悶を如実に表す悲惨な筆致に、我ながら往生際の悪さを噛み締める。

「……確かに」

横から覗き込んでいた高貴なお方が大きく頷いて、やっぱり破り捨ててしまおう、とネーナが考えついたときには申請書をつまみ上げていた。

「おめでとっ」

メイはなんの気なしに言うのだろうが、その一言はネーナを打ちのめした。

おめでとう。人妻。騎士の嫁。ダラハーガまで二人きり——それっていわゆる、新婚旅行？

いまのいままでどこか他人事だった話が、現実感を帯びて両肩にのしかかった。頬がヒクヒクと引きつっているのが自分でもわかる。「新妻というのは、もっと晴れやかな顔をしているものだと思った」ぎし、と椅子をきしませて、メイがさっきまでファイスのいた場所に腰を下ろした。完璧なラインを描く口元に薄い笑みを浮かべ、長い脚を組み、両腕を重ねてそこにもたれる姿は絵のようだ。ゆっくり観賞する気分でないことが、残念なような割とそうでもないような。

眉と口をへの字にするネーナに苦笑して、彼はやや強引に話題をかえた。

「組合長とはうまくやっているか？」

「え、うまく……？ はい、まあ普通に」

魔術師組合の組合長といえば都の名士だから、養女であるネーナがそう訊かれても無理はない。が、この人がその質問をする意味がわからない。なんの探りかと身構えるネーナに、メイは苦笑を深める。

「今回の件で不興を買ったなら、すまないと思つてな。だが俺も塔の石頭には手を焼いているんだ。微罪を盾にして悪いが、親父殿に嫌な顔をされても頑張ってくれ」

「微罪と言っていただけるのは正直助かりますけど、くそ親父がどんな顔したって別にかまわないんです。ただ、同僚に睨まれるのは困りますね」

自分で言っていまさらながら心配になった。

需品課は作業量の割りに人手が少ないので、急に何日も空けるとなったら当然他の職員に皺寄せがいく。内勤が主な職場で都合よく出張のネタが沸いて出るわけもないし、そのへんの処理は、そういえばどうしたらいいのだろう。

「バーにすべて押しつけるか。いや、さすがに大泣きされるだろう。」

口を閉ざして黙り込むと、メイの大きな手がほんと頭に載せられた。

「ファイスにはさつさと出発してもらわなければならんし、今夜中に俺から組合長に使いを出そう。必要なら人手も回す」

「あ、ほんとですか？ それなら問題ないです、ありがとうございます！——ます！」

ほつと安堵して手を打ったところで、ノックもなしにドアが開いた。蝶番の軋む音に振り返ると、ファイスが訝しげな顔でその場に立ち止まっている。

「……出られるか」

言って彼が差し出したのは、ネーナがくるまれてきた濃紺のマント。退室を促されていると察して、あたたかな掌の下であわててメイに向き直った。

「本日は、えーっと、お邪魔しました。色々帳消しにしていただけるよう、頑張ってきました」

中途半端な謝辞を述べると、メイは一瞬きよんと目を丸くした。それから小さく笑って、もう一度ほんと手を弾ませる。

「明後日の夜には迎えをやる。頼んだぞ」

露骨な子ども扱いだが、七歳も年上の人にそうされるのは悪い気分ではなかった。

「はい。ありがとうございます」

そして対面時と同じように——ただし妨害も意地っ張りも抜きで

——丁重なお辞儀をしてから部屋を出て、絢爛なる城館の玄関先では侍女から約束どおり焼き菓子の箱を持たされた。表で待っていたのは、来たときと同じ御者と馬車。乗り込む前に菓子のお礼を言うのと、無表情だった侍女が少しだけ微笑んでくれた。

「楽しんだようだな」

小さな扉を後ろ手に閉め、白けた様子でフェイスが言う。壁に打ちつけられたカンテラの淡い光に、冴えない横顔が浮かび上がる。膝の上にずっしりと重量感のある箱を載せてほくほくしていたネーナは、素直に頷いた。

「メイは案外いい人だったし、侍女は美人だったし、お菓子は絶品だし。赤豹騎士サマを見られなかったのは残念だけど、概ね満足」

本来の目的とはまったく無関係のところまで納得していると、フェイスの手がひょいと菓子の箱を取り上げた。

「黒竜騎士を目の前にして、赤豹ごときに気をとられるとはな」

そう言った無然とした表情が痛快で、思わず鼻で笑った。ネーナにしてみれば、騎士など黒竜も金獅子も関係ない。せっかくだから見てみたい、という珍獣に対するのと同じ興味があっただけだ。元々棲息する場所の異なる人種、今回の件が片づいたらまったくの他人へ戻るのだから。

この男は、よほど自分に自信があるらしい。もっとも黒竜騎士になるのは難しいというから、相当なステータスには違いないだろう。普段正体を明かせない分、既にバレているネーナには黄色い声で騒いでほしかったのかもしれない。

「すみませんね、気が利かなくて。それ返して」

明日の朝、ジールにその菓子をくれてやって仰天させるのだ。どこで買ったか教えてくれと尋ねてきたら、交換条件であの薄焼きパイの店の所在を聞き出す。しかもこれは買えるものではないから、だまされたと地団駄を踏むヤツを指差して笑うこともできるという、

一石二鳥。

完璧な計画ににやけるネーナは両手を出したが、ファイスは急に真顔になって箱を足元に置き——あれ、と思ったときには、来たときと同じく窓際まで追い詰められ、さらなる苦境に陥れられていた。「……で？」

眉間に峻険な山を刻んだ洪面で、咽喉の奥から搾り出すようにうめく。だがしなやかな身体をひねってネーナに向かい合う騎士は、こともなげに笑って首をかしげた。

「で、というと？」

「この体勢はなんなんだって言うてんだよッ！ 離れるよ、顔が近いんだよ——！」

壁に背をつけ、両脚をファイスの小脇に抱えられ、顔の横に片肘をつかれている。一体なにゆえ、六人乗りの箱馬車の中にいてこれほど密着する必要があるのか理解できない。見えない乗客でもいるというのか、いるならいるでこんな格好を見せることには大いに異議がある。

精一杯の眼力で睨みつけると、ファイスは目元を緩めて空色の瞳を甘く揺らめかせた。

「恥ずかしがってみせるおまえも可愛いが、そうされるとますます放せなくなる」

「はあっ！？ は、恥ずかしがってんじゃない、怒ってんだこのアホ騎士があ——！」

「顔を赤らめて潤んだ目をして、牙を剥いても仔猫のようだな」

「こ……っ！？」

お手上げだ。ネーナは意思の疎通が図れない生き物を前に途方に暮れた。この男は、脳の中まで生息域が異なるらしい。

むなしく口を開閉させ、あきらめた。この騎士相手にまともな会話を試みると、ものすごい徒労感に襲われる。——そしてネーナ自

身も襲われる。

脚を抱えた手がするつとスカートの中に忍び込み、膝をなでる感触に鳥肌が立った。

「くおらエロ騎士ッ！　どこさわって——」

繰り出した拳は、だが二度目のヒットには至らず大きな手につかまれ、乗り出して浮いた背に腕を回される。不意にやわらかく耳朶を食まれ、ネーナは悲鳴を飲み込んだ。軽く歯を立てたまま、ファイスは低く笑って囁いた。

「二人きりになった途端、随分愛想がよくなったようだな」

ネーナは目を瞠った。この展開でどこをどうしたら愛想がいいと受け取れるのか、本気で彼の頭が心配になった。

しかし続く言葉に、相手がちがうと理解する。

「しがみついたり、髪に触れさせたり……あの方はそれほど魅力的か」

「あの——って、メイ？」

その尊称を口にした途端、耳殻に添えた歯を強く立てられる。鋭い痛み、今度こそ悲鳴を上げた。

自分のしたことが、メイの護衛たる彼にとって腹に据えかねるほど不遜で不敬であったというなら、そうだろう。一から十までその通りだ。だがその罰としての方法なら、こんなことをするのは間違っている。

他人の髪が頬に触れるくすぐったさも、力強い腕を背に回される違和感も、そこに親愛以上のなにかが滲めば生まれて初めて覚える感覚だ。羞恥と困惑が腹からせり上がって、視野が急に狭くなった気がした。

「も、もつしない！　しないからとにかくはなしてッ——」

涙声で叫ぶと、噛まれた場所に舌が這わされた。えもいわれぬ痺れがつま先まで駆け抜けて、顎の先がふるりとふるえた。

「もうしない？　だれにも——他のだれにも触れさせないと、誓えるか」

「なん、なんであんたにそんなこと——」

ファイスの唇が耳元を離れる。ごつつと額を合わせて覗き込む瞳が、血のような紅に底光りして見えた。ランタンの灯が、視界の端で大きくぶれる。

眩暈だ、と気づいたときには、唇に濡れてあたたかなものが押しつけられていた。

「……ッ！？」

下唇を軽く吸われ、離れたと思うとまた重ねられる。抵抗しなければと思うのに、つかまれた手はまったく動かせず、ファイスの胸にあてた手もふるえるばかりで押し返す力もなかった。黒髪から香るオレンジの匂いに酔ったのか、頭の芯がぼうつとする。

強くあわせられた唇が動くたびに、口づけが深まる。いつの間にか両手で頬をはさまれ、上向けた顔をそらすこともできなかった。

「あ、やめ……っ」

ガクン、と車輪が溝を踏んで車体が揺れる。それに乗じて開いた口に、舌が差し込まれた。血圧が一気に上がり、瞬時に下がって貧血を起こしたかと思った。指先が冷え、ファイスの膝の上から片脚が滑り落ちる。

ネーナの足りない頭も力加減の利かない身体も怯え竦んでちぢこまり、溶けた鉄のように熱くやわらかなファイスの舌に翻弄された。根から折り取られそうなほど強く、一転なでさするように優しく。上顎の凹凸をたどり、奥歯の生え際までゆるゆると。そうされるたびに、律儀なほどきつちりと尾？骨のあたりがふるえ、脳髄までどろどろに溶かされてしまう気がした。触れ合った部分から響く聞いたこともない淫らな音がやけに大きくて、侵蝕する他人の質量がネーナの思考まで押し潰していくようだった。

「……会わせなければよかった」

唇の先を触れさせたまま、ファイスが囁く。

「あの方に魅せられない女はいない。知っていたはずなのにな……」

低い声はかすれて熱っぽく、どこか拗ねているようにも聞こえた。いつにも増して回らない頭でぼんやりと黒の太子の相貌を思い出し、ネーナはぎこちなく顎を引いて首を振る。噂にたがわぬ美青年だとは思ったし、大人物のオーラを放つてもいたけれど、こんなふうに口づけたいとは思わない。

（——こんな、ふうに……？）

では、ファイスとは望んでこうしているのだろうか。

ゆっくりと浮上しかけた意識を遮ってかさついた指が耳朵をなで、うなじをくすぐると、背筋がぞくりとふるえた。それを見届けたかったのか、ふつと笑ったファイスに再び強く唇を奪われる。

厚みがなくて酷薄そうな唇は、その分だけ器用なのかもしれない。キスといえば嘴をくつつけるもの、といった程度のイメージしかなかったネーナに、深く甘く、淡くやわらかくて表現できない感覚を植えつけていく。

もういいや、と、なにかを投げ出してしまいそうになった。膝に落ちていた手を持ち上げ、指先で上着をよじ登るようにしてファイスの頬に触れる。唇をほどいて離れたファイスは、まるでいま初めて出会ったみたいな顔をしていた。

驚きともとれる表情にどこか懐かしいような、胸が絞めつけられるような痛みを覚えるのがなぜなのか、わからない。でも世界はいったって謎だらけで不可解で、どんなに教授たちが頑張って説明してくれても理解できなくて、だから、それが泣けるほどの幸せだと間違えたって仕方ない。

ネーナはそつと、濃灰色の布地に包まれた肩に頬を寄せた。耳に落ちかかるあたたかい吐息に途方もない安堵感を覚えて、目を閉じ

る。

一体どれだけそうしていたのか、はっと我に返るとファイスの胸にもたれてきちんとベンチに座っていた。ロングスカートの裾は脛まで覆い、膝掛けまで掛けられている。正気を取り戻して自分の置かれた状況を確認し、ネーナはいますぐ馬車から飛び下りて車輪で挽肉になるべきだと思った。

（なに——なにッ!?　なんであんなこと!?!）

だらだらと冷や汗をかき、おそろおそろ目玉だけ動かしてファイスの顔を見上げる。ランタンに照らされた横顔は爽やかで、鼻歌でも歌いだしそうなほどの上機嫌が滲み出ている。カーテンを開けた小窓から薄暮の外を眺める目は細められ、それがネーナの視線に気づいてこちらを向いた。

「げっ」

思わずうめいて目をそらす、ファイスは気分を害した様子もなく、肩に回した手で反対の窓を指差した。

「じき七番街の街門をくぐる。外は寒いから、それを羽織っていけよ」

それ?　と空色の瞳が見つめる先をたどると、毛織の膝掛けに行き着いた。薄く軽く、とてもあたたかい。身を飾る品物の相場は一切不明なネーナにも、それが防寒具としては高価な代物であることだけはわかる。

「羽織って——え、七番街?」

肩に載った手を無造作に払って窓に飛びつき、カーテンをつまみあげると、まさに街区を仕切る街門の前に到着するところだった。アーチ型に区切られた門の向こうは、別世界のように光の洪水を起している。

「ちょっと、うちは五番街なんだけど!?!」

九つあるうちのどの門だろう、と街壁に打たれたプレートを読み取るべく目を凝らす。五番街の南東にある我が家から、あまり離れたエリアだと帰りが心配だ。冬の夜道を歩いて帰宅するのは苦行に等しい。

「食事してから送ってやる。食いたいものは？」

ファイスがネーナの手からカーテンを引き抜き、膝掛けを肩に掛けなおしてくれた。機嫌のよさそうなところを申し訳ないのだが、ネーナにはこのエロ騎士と食事をともにする気はまったくない。

なにが悲しくて突然わけのわからん言いがかりをつけた拳句、乙女の唇を――舌まで入れて！――奪うような男と一緒にものを食わねばなんのだ。いくらこの世で一番愛している言葉が「他人の奢り」であっても、それだけはきっぱりとお断りするに吝かでない。

ネーナは腰を浮かせて向かいの席へ移動し、毛織の膝掛けをファイスに突き返した。

「腹なんざ減つとらん！ あんたのオゴりで食いたいものもない！」「がつんと、決然とした表情で言い放つ。だが、キマった、と頬が緩みそうになった瞬間、ネーナの腹が持ち主の言葉を裏切って盛大な音を立てた。

我が腹ながらそれはもう、見事なタイミングだった。

「……………」

「……………」

気まぐれ視線を交わし合う。頭の後ろから壁越しに御者の制止がかすかに聞こえ、馬のいななきとともに馬車がとまった。

「……蒸し鶏？」

突き出した腕をそろそろと引き戻し、素晴らしい宣言をなかったことにして回答する。

ファイスは実に楽しげに、腹を抱え、大声で、遠慮なく笑ってくれた。

今日は招かざる客が万来だ。

ガリオン・メイは整った顔立ちを凶悪にしかめ、背もたれの高い一人掛けの椅子に腰を下ろしていた。白いズボンに包まれた長い脚は、だらしなく足首で組んで投げ出されている。

まず女王宮での朝議から戻るなり、百日に一度も顔を見せない騎士団総長がやって来た。みっしりと生えた顎鬚をなでさすり、白髪交じりの赤毛をなびかせ、銀灰色のマントまでまとって。どんな厄介ことが起きたかときよつとする彼を一瞥するなり踵を返したのだから、あの親爺は一体なにがしたいのだ。だがとりあえず、騎士の正装を煩雑な手続きを省いて太子宮に出入りするための通行証程度にしか考えていないことは間違いない。

次に無言でノックもなしに部屋のドアを開けたのは、眠たげな顔に無精髭を生やし、だらしなく臍までシャツをはだけた格好の白鷹騎士団長。肩から羽織っただけの白い騎士服は妙にパリっとしていたから、おそらくクローゼットから出したのも久方ぶりだろう。どころか彼自身を最後に見たのがいつだったか、メイはすぐには思い出せなかった。くすんだ金髪は鳥の巣のようにもつれ、青灰色の目は日ごろの不摂生を如実に語る濁り具合。仮にも女王のおわす宮城内でこうまで怠惰な身形を見る機会もそうはない、と思って固まっていると、鼻先で一つ嗤って帰って行った。

三番目に現れたのは、ここ数年思い出したように太子宮に出没する女王の宰相。愛すべき輝ける禿頭に小さな帽子を載せ、そろそろ

身を固めてはどうかという趣旨の話を延々しゃべっていった。あの爺様が持ち込んだ見合い用の女性の肖像画と釣書は、既にベッドの土台が組めそうな量で物置を占領している。まったく余計なお世話なのだが、五歳下を筆頭に三人いる妹たちの嫁ぎ先にまで関わりと心許なげに諭されてしまえば、無碍にもできないところがつらい。

最後に目下最大の懸案事項の中心にいる少女を、彼の騎士がつれてきた。それはそれで実りはあったが、帰り際ちよつと二人で話をしたら、騎士にもものすごい嫉妬の目で睨まれた。ガキに妬かれると後が面倒だ、機嫌を直して帰ればよいが。

一日分の生気をすべて吸い尽くされた気分であなだれたところへやって来たのが、いま目の前で行儀よく長椅子に座っている青年だ。「……それでおまえは、一体なんの用があつてここにいるんだ」

一向に口を開かない彼に焦れたのは、メイのほうだった。背後の壁際に立つ黒竜騎士が、わずかに警戒したのを気配で感じる。

「あれえ、御用があるかなあと思って待ってたんですけど。お聞きになりたいこと、ないですかあ？」

この国で女王、王婿である大公に次いで三番目に高貴な人物から邪険にされているというのに、青年に動じた様子はない。砂色の垂れ目を細め、上唇だけぽつりと厚い口元には笑みが刻まれている。メイは額に落ちかかる、伸びすぎた前髪をかき上げた。癖の強い巻き毛が指にからみ、それが無性に腹立たしかった。

「尋ねたところで、おまえが正直に答えるとも思えん。用がないなら行け。今日は客が多くて、おまえの顔など視界に入れる気力も尽きた」

「そうそう、その、最後のお客さんですけど」

自分に都合のいいところだけ拾い上げた青年に、メイは音高く舌打ちした。傍らに立つ側近が、苦笑したのがわかった。

「僕昨日、会いに行っただですよ！ 想像してたのちがうけど、なかなか可愛いコでしたねえ。でもちょっとおしゃべりしてたら、あなたの番犬に僕だってバレちゃってえ、喰い殺されそうな顔で睨まれましたよ」

「……ちよつと待て、シュツツエ」

思わず肘掛けにもたれ、額に手をあてて目を閉じた。

「なぜおまえが俺の客がだれだか知っている。いや、なぜわざわざしゃべりに行っただ、そしてなにをしゃべってきた。そもそもどうしておまえが都にいるのか、まずそこから釈明してみせろ」

我ながら見事にドスの利いた声が出た。しかしシュツツエにはなんの脅威にもならないから頭にくる。彼は垂れ目をさらに垂れさせてにつこりと笑った。

「やつぱりあるじゃないですかあ、質問。しかもたくさん」

「うん、よし。コーキ、俺は急に体調を崩したから寝込む。その不良騎士はおまえが相手をして、必要なことをすべて聞き出しておけ」

だが立ち上がりかけた肩は強引に押さえつけられ、上がった腰が椅子に沈む。恨みがましく側近を横目で見やれば、彼は穏やかで優しい顔に仮面のような笑みを浮かべていた。

「この程度の小者を相手に試合放棄など、あなたらしくもないですよ」

そして薄茶の瞳がきらりと光り、肩をつかむ手に力がこもる。

「小者って僕のこと？ ひどいなあ、筆頭殿」

爪の先ほども堪えた気配のない、鼻にかかる声は右から左へ聞き流す。メイは腹心の側近が笑顔の裏に隠すものを正確に読み取って、背に悪寒が這い登るのを感じた。発せられた言葉以上の圧力に屈服して居住まいを正す自分を、愚かだとか惨めだとか思う余裕はなか

った。

「……で？ 特務にあたる者以外、白鷹は北の国境に送ったはずだが」

「じゃあ僕も特務にあたってるってことでえ。いいでしょう？ 騎士団の頭は総長殿で、僕が次に従うのは白鷹うちの団長ですからあ。あなたの知らない任務だって存在するんです」

言ってくすくすと笑うシュツツエは心底楽しそうで、メイは一瞬本気で彼を殺したくなった。だが残念なことに——本当に、心から残念なことに——メイには彼を殺せるだけの物理的な力がない。周りの化け物じみた連中に比べれば戦闘力は皆無に等しく、精々が拳で頭を小突ける程度だ。しかもこの男は腐り切っても白鷹騎士、それすらもまともにあてられる気がしない。

メイは再度舌打ちし、笑いをおさめたシュツツエを睨んだ。今度は促すまでもなく、彼は自分から語り出した。ただし、質問の答えではないことを。

「あなたと僕って割と長いつきあいじゃないですかあ、ねえ？ そろそろ僕にも教えて下さいよ。あのコ、あなたが子飼いを使ってまで押さえておかなきゃならないほどの——なにを、持ってるのかなあ」

かくんと首をかしげ、うつすらと微笑むシュツツエは無邪気にすら見えた。しかしこれほど腹の黒い男もそうはいない。メイは眼前に見えるものを遮断するように目を閉じ、開き、傲然と言いつつ、「ダーレンに訊いたらどうだ。あいつなら、俺の頭の中だってお見通しだろう」

途端にシュツツエはつまらなそうな顔をして、ひょいと肩をすくめた。

「僕、そんなに自殺願望強くないんですけど」

白々しくそつぽを向く魔剣士の横顔を見つめながら、メイは内心

でふむとうなつた。彼の発言には得るものがある。

白鷹はなにも知らされていない、もしくは掴んでいる以上のなにかがあると疑っている。尋ねることすら躊躇わせるほど、ダーレンの壁は厚い。それでなぜ今もってダーレンに盲従できるのかという疑問は増すが、そこはとりあえずいまは措く。

状況を鑑みれば、これは異状だ。自分の推測が正しいとするなら、白鷹は真っ先に彼女の詳細な情報を得ていておかしくない。ダーレンが『塔』と手を組み、なにかを成そうとしていることだけは間違いないからだ。

自分の手の内はほぼ読まれている、ということもまた明らかだった。ただ、ダーレン本人はともかく、白鷹騎士団はいま目になっているものがすべてだとは思っていない。まだなにか奥の手を隠していると判じている。

もしかして、往年の猛者やら出不精の代名詞やらがわざわざここへやって来たのは、自分の顔色からなんらかの情報を得るためだったのかもしれない。フェイスが伴った少女の正体など彼らなら容易に知れただろうし、それならば、二人ともが無言で立ち去った理由もわかる。

（いや――）

メイは目を伏せ、暗い青の瞳を隠した。

ただでさえ腹に一物抱える白鷹騎士の中でも、シュツツエはとくに食えない男だ。彼の言動から騎士団内部の事情を推測するのは危険かもしれない。

互いに疑心暗鬼に陥っている。情報が錯綜し、そこに個々の思惑が絡んで全体の構図を複雑に見せている。こちらに都合のよい幻想を手放してはいけない。それ以上踏み込ませないよう、細心の注意を払わねばならないのだ。

「……シュツツエ・ブラウスト、退室を命じる。本部へ帰って、団長の顔でも見ながら積もる話をしてくるがいい」

沈黙考の結果、選んだのは最低な命令だった。なんの芸もひねりもない、これではビビっていると侮られても仕方あるまい。

だが口調を改めて低く言いつけると、シュツツエはむっと秀麗な顔をしかめた。

「だからあ、僕あのおじさんと話したいこともないんですけどねえ。どうせまた冗漫な式を書き散らかして、公式がどうだ定理がどうだつてやってるんですから、あの魔導オタクは。……まあいいや。ではメイ、御前を失礼しますよお」

そしてばん、と膝を叩いてから舞うような軽快さで立ち上がり、壁際の黒竜騎士へ片眉を上げてみせる。そのまま振り返りもせず扉の向こうへと歩み去る背を、メイは視線だけで追った。

「……私が言うのもなんですが、人間じゃありませんね」

コーキのつぶやきは平坦で、それだけに彼の膨れ上がった敵愾心をうかがわせる。メイは吐息で応じ、背後の騎士はかわらず無言だった。

メイもコーキも、黒竜騎士本人も——黒い帳の下に完璧に隠した素顔を、気配だけで悟られたことに気づいていた。

軽く連続したノックの音に、メイは視線だけドアに向ける。

無言で入室してきたのは、数刻前に騒々しい客をつれて出て行ったはずの騎士。女官が部屋中に灯した明かりに、眩しげに目を細めていた。

「無事に送り届けたかよ？」

揶揄する口調に、ファイスは眉を寄せて目を伏せる。

「それが外的要因による不適切な事態を意味する懸念であるなら、まったく問題はありませんでしたよ」

「なんだ、彼女のスカートの心を心配するべきだったか」

「残念ながらご無用に」

疲れたように首筋に手をあて、勧められもせぬうちに長椅子に腰を下ろした。そのぐったりとした、だが満足げな様子に小さく笑って、書類から顔は上げずにメイが問う。

「不落と知って敵前逃亡するか？」

「まさか。今日のところは戦略的撤退です。あまり怖がらせると、今後の作戦に障りますからね」

「可哀相に、不運な娘だ。おまえに目をつけられては、大事に守ってきた貞操も風前の灯だな」

「人聞きの悪い」

メイの言葉に軽く肩をすくめ、ファイスはずるずると長椅子に倒れ込んだ。そのまま肘掛けに膝をかけ、手枕で転寝でもし始めそうな勢いである。

「おまえ、言葉遣いはともかく、行儀の悪いところだけはなおらなかったな」

ため息とともにあきれ声をもらして立ち上がり、メイは壁に据えつけられたキャビネットに歩み寄ると、酒瓶とグラスを二つ取り出して戻った。

長椅子に半身を起こしたファイスに立ったまま酒を注いだグラスを渡し、執務机につく格好で椅子に座る。好きに飲めるようにと、酒瓶はテーブルに残してやった。

「ギルドに送り届けたのか？」

「いいえ、自宅です。五番街の王立歌劇場近くの、高級住宅街。薄給だとか言っていました、なかなかの物件でしたよ。……まったくあなたの手の長さには驚かされます。少なくとも直轄領の中で、あなたに知られずに悪さするのは不可能でしょうね。まるで身体が二つあるようだ」

長椅子に身を投げ出した、だらしない姿と相反する言葉の響き。メイはやつと、ファイスを正面から見据えた。

しばしの沈黙をはさんで、メイが形よい唇を歪める。

「なにが言いたい？」

「別に？ 生贄にしたいのか、宝物のように抱え込んで護りたいのか、いずれにせよ中途半端をなさると思っただけです」

言ってファイスは、勢いをつけて体を起こした。

「まあ、もつとも？ 近いうちに警護も監視も必要なくなるでしょうね。このまま都を出れば、どんな形にせよ結論は出ます。それが必ずしも彼女にとってよい方向ではなさそうだが、ということはわかりました。必要以上に饒舌になるとき、人は大抵後ろめたいことがある。——あなたも案外、普通の人間だったんですね」

ふと、メイを見つめるファイスの空色の瞳が底光りする。

「可哀相に、本当に不幸なヤツですよ。いつも、どこにいても、自分のことを自分が一番わからないまま、周囲の思惑に翻弄されるし

かなかったなんて。しかもそのことにすら気づく余地がない」

今度こそ、二人の男は真つ向から睨みあった。明暗正反対の、しかし同じ色の瞳の奥を探りあうように、じりじりと音を立てそうなほど強く視線がからみあう。

ほどなく、先に口を開いたのは次代の王だった。

「……黒竜騎士ともあろうおまえが、公私混同するとは夢にも思わなかったが」

ファイスはグラスの腹を叩くようにして指を躍らせ、応じる。

「それをあなたがおっしゃるとはね。俺はあいつを取り戻す、そのためだけにこんなバケモノになったんです。裏切ったとしたら、俺ではなくあなたのほうだ。——いや」

言葉を切って、どこか遠い場所を見るような色を目に浮かべた。

「最初からそのつもりだったんだから、裏切ったわけではないんでしょうね」

「ファイス」

苦い声は演出せずとも咽喉の奥からこぼれ出た。ファイスは表情のない顔を上げ、その瞳孔が一瞬だけ縦に収縮し、すぐに円形を取り戻す。

「わかってますよ。……竜の顎あぎとに懸けて」

眉を上げておどけて見せると、ようやく二人の間の緊張が霧散した。その残滓を振り払うように髪を揺らし、メイは重い腕を上げてグラスを顔に近づける。

だが形よい唇がその縁に触れる寸前、またしてもノックの音が室内に響いた。返事を待たずドアを開けるところがファイスと同様そこそくに無礼だ。メイは琥珀色の液体を一口含み、ゆっくりと飲み下した。

「おや、ファイス。戻ってたんですね」

入室するなり、部屋の主より先にファイスに声をかけた青年は、漆黒の騎士服をまとい薄茶の髪を揺らして小首を傾げる。薄茶の優しげな瞳とやわらかな声が印象的だが、この男を外見で判断してはいけないと、メイは背筋の凍る恐怖の記憶とともに思い知っている。

黒竜騎士筆頭、コーキ・マラード。

団長を置かない黒竜騎士団の実質的な親玉であり、唯一外部に向けて素顔と素性を晒す顔役だ。メイがただの王子であったころには個人教師の息子であり、太子となつてからは最初に得た黒竜騎士である。先ほど、騎士団総長の小姓に急かされて、騎士団本部へと足を運んだところだ。

穏やかな面差しが気だるげで、心持ち青ざめて見えるのは灰汁の強い親爺の相手をしてきた疲労からだろ。くたびれきつた様子に苦笑して、メイはグラスを唇から離れた。

「本部はどうだった？」

「あいかわらず恐るべき騒々しさで、頭痛がしました。……あなたの姫君がいらしてたんでしょう？ 今日には城に帰らないかと思いましたが」

台詞の後半にてんこ盛りになれた皮肉と嫌味に、ファイスが気づかぬはずもない。彼がグラスの陰で舌を出したのを見て、メイはくすつと笑った。

「あまりいじめるな、コーキ。ファイスなりに頑張ってるんだ」

「チビすけがいくら頑張ろうと、チビすけなりですけどね」

につこりと微笑んだコーキの手が、ファイスの頭をくしゃくしゃとなで回す。ファイスは心底嫌そうな顔で鼻に皺を寄せるが、目を泳がせたまま無抵抗だ。

性格が見た目を裏切る筆頭は、ファイスの手からグラスをひったくって口をつける。

「それで？ 七年ぶりに再会して、気持ちの整理はついたんですか？」

「整理？」

奪われたグラスを目で追いながら、ファイスは鸚鵡返しに意味を問うた。一息にグラスを空けたコーキは、名残惜しげに底に残ったわずかな液体を眺める。

「彼女に執着し続けた理由が、単なるガキの所有欲なのか、孤児院で育った仲間意識なのか、それとも純粋な恋心なのか——と、訊いてるんですよ」

「それは……っ」

ファイスは勢い込んで言いかけて口を閉ざし、苦しげにうつむき、メイはコーキとそつと目を見交わした。

ファイスの横顔に浮かぶものは、紛うかたなき苦悩。奪われたから取り戻したい、とそれだけを考えているうちに、元々抱いていた思いがわからなくなったのだろう。まして相手の生死も知れぬまま経過した月日は七年、気持ち揺らいで変質しても無理はない。

十年前、ファイスとネーナはまったく別の名まえを名乗って同じ孤児院にいた。

感情も意思もない、息をする人形のようなだった彼女を支え続けて、三年暮らしたという。だがある日彼女は連れ去られ、以後その行方は完全に不明だった。——というのが、つい先ごろまでのファイスの認識。

七年、ファイスはネーナを探し続けた。そのただけに呼吸し、食べ、眠り、ついには『竜の試練』をも乗り越え黒竜騎士になぞ成り果てた彼を、メイは都から遠ざけ続けた。あるときは東の山奥に、あるときは西の海辺に。

ネーナは孤児院から消えて以降、一歩たりとも都を出ることなどなく、自分はそれを承知していたというのに。

それもみな、ファイスに本懐を遂げられては困る事情があったからだ。そしてその事情を、ファイスに対して明らかにしたのはつい数日前のこと。

なにもかも知っていて隠していた自分のことを、彼はきつと恨んでいるだろう。昔の自分は利用できるものならなんでも利用したし、愛も情も駒を彩る模様くらいにしか思っていなかった。

メイは親指の先でグラスの縁をなでながら、鈍い後悔が胸に降り積もるのを痛みとともに受け入れる。

黒竜騎士にならなければ、ファイスがネーナと再会することはできなかつたと断言できる。だが忌まわしき存在に堕ちた彼が、本来の意味で、再会した娘と添い遂げることは叶わない。

ダーレンは白鷹騎士の心を根こそぎ奪って宮廷を去った。彼に対抗せんとして、白鷹を凌駕する力を持つ黒竜を得ることに躍起になった。そのために、ファイスの人生は狂ったのだ。

『試練』に打ち勝った彼らの魂には、メイへの忠誠が刻み込まれる。口でなんと言おうと、感情がどれだけ負の方向に振れようと、ファイスがメイに背くことはないだろう。そのことをこのごろ、虚しいと思うようになった。

答えられないファイスをそれ以上は問い詰めず、コーキはもう一度その黒髪を指先で乱した。

「おとなしく花嫁になりそうな姫君ですか？」

そして片手にグラス、片肘をファイスの頭という姿勢で、長椅子の肘掛けに腰を落着ける。まるで家具扱いという態度で、質問はメイに向けられていた。口元をひきつらせながらも黙っているファイスに、深く苦い悔恨も忘れてこみ上げる笑いをこらえるのに――苦労だ。

「おとなしく、ね……。まあ、可愛い娘だったよ。攻撃は最大の防

御、と思ってるタイプで」

「へえ？　うちの連中と気が合いそうですね」

「おまえたちと一緒にするな。ハリネズミだって引っくり返せば腹は急所だ」

「メイ。若い娘さんに引っくり返すだの腹を出せだの、あなたなにを考えてるんですか」

「え、いや俺は別に――」

「頭に花を咲かせたいなら、おっしゃって下さい。木槌がいいですか？　金槌ですか？」

どっちも同じだ、それじゃ花が咲く前に花畑へ直行だ――と言いかけて、口を閉ざす。「では試してみしましょう」から「赤い花が咲きました」という身の毛もよだつ展開が、血の帳の向こうに見えた気がした。

若干以上、無理やり揚げ足を取るコーキは、あくまで笑顔だ。耳さえふさげば、どんなに甘い言葉を吐いているのかと勘違いできる。これは相当、本部で苦い思いを味わったと見える。騎士団総長ダリル・シエンボルトは、ダーレン・グラヴィールと同じ時代を駆け抜けた古強者だ。当代太子の不甲斐なさを、本人にかわってちくちくと突かれてきたのだろう。

ふと見やると、コーキの手元ではひっきりなしにグラスと酒瓶が触れ合い、流れる酒がとぶとぶと景気のいい音を立てている。今日もこの蟒蛇うわばみに、キャビネットの中身を空にされる予感がした。

太子宮の予算に酒代が計上できればいいのに。そう無駄なことを思いながら、メイは自分のグラスを口に運んだ。

「ダリルはなんだって？」

その名を出した瞬間、コーキのこめかみがぴくりと引きつったのを、メイは見逃さなかった。話の大方は見当がつくだけに、その反応はいただけない。

コーキはグラスをテーブルに置き、かわりに酒瓶の底を透かすように燭台の火にかざした。

「いつものことですよ。各地に散らばる黒竜の動向を探りたくていらつしゃる」

だがコーキは、そう予想に反する言葉を口にした。

「そう、か……それは、なによりだ」

メイはとりあえず適当な返事しながら眉を寄せ、ファイスの顔に視線を走らせた。彼の前で話したくない、ということか。それでは話をそらせという暗黙の命令に肅々と従うほかない。

「それにしても、偽装結婚とはな」

軽口を装ってみればコーキが口元を緩ませ、メイは首が繋がったことに安堵した。その手の中で琥珀色の液体が揺れる様を眺めていると、ファイスが肩をすくめてやつと口を開いた。

「ダラハーガに同行させるもつともらしい理由を、咄嗟にでっち上げたんですよ。即断を持って旨とする騎士魂の賜物です」

「闘技場では頭真つ白のまま飛んで行つたくせに、それも騎士魂か？　まあ、おまえにとっては望みうる最高の口実だったかな」

「後のことまで考えてくれたら、チビすけも一人前だったんですけどね」

年長二人でここぞとばかりに畳み掛けると、年下の騎士は眉根を寄せてふいと顔をそむけてしまった。

その不満げな様子に満足して、メイは思い出したように小さく笑いをもらした。

「それにしても、よく彼女を引っ張ってこられたものだ。先ほどは調子よく話を合わせてみたが、本当はダーレンはなんと言っていた？　直接会って宣戦布告したんだろう？」

ファイスは少し身じろぎし、ぎこちない仕草で自分の耳を引っ張った。

「特になにも。気絶するまでぶん殴ってくれた七年前の礼をして、後は強権発動を盾にこり押ししました。今のあの人は、表向き一般市民ですからね」

「ですが、よりにもよって黒竜騎士と結婚するだなんて与太話、よくもあの方に鼻で嗤われな——」

不審げに言いさしたコーキが、不意に黙り込んだ。

それが素であるかのように張りついていた笑みが消え、半眼でフェイスを見下ろす。その先でフェイスが視線を泳がせるのに気づき、メイは腹の底が冷えるのを感じた。

「まさか——ダーレンに言わなかったのか？」

「……ただ法に抵触する行為があったから、ネーナを拘束するとだけ伝えました。委細を余人に明らかにしないという取引で減刑を考えているから、一切の質問まかりならん、と」

開いた口がふさがらない、とはこのことだ。

「お、まえな——」

「そんなことをして、後でバレたらどうするんです。戸籍の操作が云々、というのは方便にしても、あの方はメイを毛虫のように嫌ってるんですよ？ その子飼いである黒竜と嘘でも結婚だなんて。まったく、あの方を説き伏せたと聞いてあなたの成長に涙した私に謝罪しなさい」

「……毛虫……」

あまりの言われ様に落ち込みながらも、事実なのだから反論の仕様もない。

コーキに叱られてますますふてくされるフェイスを見て、どっと全身の力が抜けた。

黒竜騎士にはそれだけの権限があるし、またダーレンがいまだ騎士団長ならともかく、その地位を離れているため詳細を話す必要は確かにない。そしてことが黒竜とネーナ個人のことであるから、白

鷹にも知られる心配がない。

頭痛を感じた。珍しくどこから事態を収拾すべきかさっぱりわからなかった。

癖の強い髪を意味もなくなでながら、メイはふと思い出し笑いをもらった。

「ネーナ・ヴァス……ね。友達のためとはいえ、このバカげた茶番に必死で取り組もうとしていた。笑っちゃ悪いが、可愛かったな」
「メイ」

「睨んでもダメだ、ファイス。やるときは手加減しないぜ？」

人の悪い笑顔に口を曲げ、ファイスはテーブルのグラスを持ち上げかけ、空だったことに気づいて舌打ちする。それから明らかに努力して話題をかえてきた。

「それはそうと、ダラハーガの手はずはどうになりました？」

「賢者殿か？ 問題ない。あっちはあっちで、色々と思うところはありそうだが……」

迷うように言葉を切り、無意識の仕草で机の縁をなぞるメイに、ファイスは首をかしげる。

黙して思案に暮れていると、再びファイスの頭を肘置きにしたコーキが優しく言い聞かせた。

「いいですか、おチビちゃん。この世の中に、思うところのひとつもない者などいやしませんよ。いるとしたら、うちのおチビちゃんくらいなものです」

むっと顔をしかめたファイスがコーキを上目に睨み、なにか言おうとして断念する。そうだ、一つ言っただけで百返されるくらいなら、黙っているほうがよほど賢い。

「なんですか、その顔は？ 褒めてるんですよ。あなたはメイと黒の塔、それにバルファイの三すくみの膠着状態を打破したんです。あのグラヴィール殿をほんのわずか四分の一步とはいえ出し抜けた

んですから、予測不能の馬鹿さ加減というのも才能ですね」

やわらかな口調でゆったりと、コーキはファイスを責め立てた。事前の計画とか予定とか、そういったことをすべてぶち壊した弟分に、それこそ思うところがあつたのだろう。

恐怖のあまりが無表情になつてしまつたファイスをちよつとだけ哀れに思いつつ、メイは転がり込んだ駒に心を飛ばす。

舞台の上に引きずり出されたからには、ふさわしい役どころできつちりと演じ切ってもらわねばならない。だが見るからに思慮が浅く——というより、思考することを最初から放棄している節のある娘に、どこまで筋書きを打ち明けていいものか。

「気がかりなことでも？」

低められたコーキの声で我に返り、メイは深い青の目を軽く瞋つた。

「いや。——いや、気がかりなんぞ、ないわけがない。俺にとつては、なにもかもが気がかりで不安の種だ」

たつぷりと含みのある目線を向ければさりと受け流し、ファイスはコーキの肘の下から抜け出ると、腕を伸ばして空のグラスを差し出してきた。注げという意味表示だろうが、なかなか不遜な態度である。

しかし気にすることなく、メイは腰を上げてキャビネットから新しい瓶を取り出すと、封を切つて無造作にファイスのグラスに酒を注いだ。溢れそうなほどに、なみなみと。

あわてたファイスが急いでグラスに唇を寄せるのを横目で見やり、メイも尋ねた。

「ネーナは過去のことを、なにも覚えていないというが？」

濡れた唇を親指でぬぐい、ファイスは頷く。

「残念ながら。出生はおるか、俺のこと忘れてるし、現状に疑

問を持っているふうでもない。まあ、俺たちに関わる羽目になったことには、理不尽さを感じているようですが」

「おまえに関わる羽目に、だろう。若い娘なら、俺とは目が合うだけで天にも昇る心地のはずだ」

澄ました顔でメイが言うと、コーキが鼻で嗤った。

それはメイの似顔絵とともに、「恋人にしたい男ランキング」の結果を載せた出版物のページで見た煽り文句である。記者いわく、「都でメイの視界に一瞬でも入りたいと思わないコは乙女じゃない！」そうだ。

ところがフェイスは気の毒そうに眉尻を下げ、ふるふると首を振った。

「恐れながらメイ、何事にも例外はございます。お気を落とされませぬよう」

その芝居がかった調子に合わせ、メイは重い息をついて天を仰いで見せた。

「俺に靡かぬ娘は女ではないというのに、おまえは悪趣味だな」

「メイ、悔し紛れに可哀想なことをおっしゃってはいけません。これは純情一途、恋に恋する夢見がちなおチビちゃんなのでから」

コーキの辛辣な愛情表現に、笑おうとして失敗したフェイスの唇が引き結ばれる。眉を寄せたその顔が薄い朱に染まっているのに気づき、コーキと顔を見合わせたらたまらず噴き出してしまった。

「これはすまん。黒竜騎士殿の逆鱗に触れたかな？」

その揶揄する声音にフェイスは顎を上げ、目元を赤くしたままでふんと鼻を鳴らす。

「お言葉を返すようですが、我がトランティアの竜に逆鱗はありません。もっとタチの悪いものがありますけどね」

その言葉にメイは、見る者の背筋を凍らせるような笑みを浮かべ、

薄い唇に立てた人差し指をあてた。

若くして既に七年のキャリアを持つ若い騎士が出て行くと、その直属の上役は限りなく空に近い酒瓶を執務机の隅に置いた。ファイスのために振る舞った酒だったのに、結局ほとんどコーキが飲んでしまったことになる。新しく封切った瓶は死守しようと心に決めた。コーキはファイスを「チビすけ」と呼ぶが、先ごろ二十歳を迎えた彼は決して小柄ではない。むしろ平均より上背があるし、コーキと並んでも少し高いくらいだろう。書類仕事が多く文官寄りのコーキに比べれば、腕や腹もしっかり鍛えている。

ここ最近は大分落ち着いているようだが、都へ帰れば七番街に潜り込み、喧嘩と女遊びに明け暮れていた時期もあった。孤児院を脱走してからメイに拾われるまでの数ヶ月を白状させれば、表面をさらっただけでも壮絶な話になる。精神的にも決して幼いところなどない。

だがファイスのそういう不安定で尖っていた青い時代を知っているコーキは、いつまでたっても彼を子ども扱いした。十と離れていないのに、可愛くて仕方がないのだ。

自分とて赤裸々な子供時代を知られてはいるものの——そういうご寵愛はいらないな、と真顔で考え込んでいたら、コーキに笑顔で後ろ頭を叩かれて前にのめった。

「……コーキ」

「はい？」

地を這うような低い声で呼んだら、眩いばかりの笑みを向けられた。怖ろしさのあまり、見なかったことにする。

「そうそう。チビすけをおちよくるのが楽しすぎて忘れていました

が、騎士団本部で、あの不良騎士に総長殿よりよほど有益な情報を流してもらいましたよ」

「不良？」

と言われて、両手の指では足りない数の顔に思い当たるあたり、実はトランティア騎士団というのはろくでもない集団なのかもしれない。

「白鷹の魔剣士。我らがチビすけのご友人です」

メイの脳裏に、先ほどここでもにこと悪意を撒き散らしていた青年の姿が思い浮かんだ。

片眉を上げてみせるコーキの声が皮肉の色を滲ませるのは、白鷹騎士団がいつかなメイに服従の姿勢を見せないからだ。さりとて、女王の忠実な犬でもない。七年前、突然その地位を返上して城を去った前の団長、ダーレン・グラヴィールに獲られたままの駒。

白鷹騎士団は、特務にあたる一部を除き全員北の国境に追いやったはずだった。つまりあの魔剣士が都に舞い戻ったのは、現団長クリス・ラズロの独断か、あるいはダーレンを通じた騎士団総長の意向を受けてのこと。無論、後者の可能性が極大だ。

少し乾いた唇を指先でなぞってから、メイは両肘をついて手を組んだ。その傍らに姿勢よく立ち、コーキが続ける。

「ファイスの考えなしな行動は、案外大きな波紋になっているようです。グラヴィール殿ですら予測不能だったのですから、意図が読みにくいとはいえあちらの対応は後手後手です」

それはいい。あの親爺が苦虫を噛み潰した顔をしているかと思うと、ちよつと愉快だ。

ネーナを求めるファイスの執念深さは、他ならぬ自分が一番よく知っている。だが昨日、あの闘技会さなかの最中、あれだけの人がごみの中からどうやって発見したか、彼女を見つけたファイスが飛び出して行ったのは自分にも想定外だったのだ。その上バカげた口実で彼女をこちらに引き入れて戻ってきた。

正直突然すぎて対応に困ったが、もともとネーナをダラハーガの塔に連行するのは計画のうちだったのだ。拉致や誘拐という手段も考慮に入れていただけに、いまのこれは歓迎すべき状況といえる。ただそれを正直に表現して賛嘆するには、ファイスの行動は浅薄すぎて嫌味の一つも言わずにいられなかっただけのこと。

とにかくこれで事態は待ったなしで動き出す。

ただ問題は、飛び入り参加の役どころだった。コーキいわくの、我らがチビすけのご友人、だ。

「シュツツエ、か……」

何度口にしても舌になじまない名前をつぶやけば、思いのほか胸に沈む憂鬱を持て余す。他の白鷹騎士同様、表立って反発するわけでも、命令に背くわけでもない。かといって、ダーレンやラズロに心酔している様子でもない。なにを考え、どう動くか読めない男。

ダーレンの秘蔵っ子、といったら、一番弟子を公言するラズロが気を悪くするか。

「つかみどころのない人ですからね。嘘は言わないけれど、余計なことまで言う癖がある」

コーキが珍しく慥然としているのは、軽薄な言動と間延びした話し方で相手を翻弄する、白鷹随一の魔剣士の顔を思い出しているからだろう。気持ちにはわかるが、ある程度の接触はやむをえない。

「情報を流す気があるのならさつき言えばよかったのに、あれは嫌がらせですね。——ファイスの姫君が、あの毒気にコロリとやられなければいいのですが」

顎を上げたコーキの笑顔の、種類がかわる。白鷹のシュツツエ・ブラウストといえば、色気のある垂れ目と泣き黒子が売りの、それは綺麗な顔の男だ。しかも本人もそれを自覚していて、最大限に活用する術を心得ている。

こちらとしても、せっかくダーレンを出し抜いて引き入れたネーナを色仕掛けでさらわれるのは業腹だ。駄々漏れの色気に惑わされ

る娘には見えなかったが、免疫がない分どう転ぶかわからない。

メイは頭の上に手を組み、どさりと背もたれに寄りかかった。

「有益な情報、とは？」

せがまなければ教えない。コーキの無言の宣言に諸手を挙げ、メイは尋ねた。コーキはちらりとこちらを見やり、軽く咽喉を整えて高く声を張る。

「——犬の鼻は鋭いって言いますけどお、案外大したこともないみたいですねえ」

あからさまにだれかの口調を真似たそれに、メイは凍りついた。

ぐつと眉を寄せ、頬をひきつらせ、亡霊でも見たように目を瞠って「ああ、気に病むことないですよ。その程度だってことはもう……ねえ？」

こちらの心情などおかまいなし、恐ろしいほど上手に口真似を続けたコーキに、メイの右手は無意識に拳大のサファイヤの原石を削った文鎮をつかんでいた。左手は、さてなにをつかもうと宙を彷徨う間に、コーキの声色が元に戻る。

「……この時期あなたの犬の鼻が鈍いというなら、それは銀狼騎士団がバルファイの間諜に国境を素通りされたという意味でしょう。そして白鷹は、その一部始終を眺めていた。眺めているだけで、なにもしなかった」

次の瞬間、コーキは一切の表情をなくして顔から血の気を引かせた。そしてメイの執務机にすつと拳を振り下ろし——哀れ頑丈な紫檀の机は轟音を上げて真つ二つに裂け、目の前で突如生まれたクレバスに向かって、書類やペンやインク瓶といったものが雪崩を起こした。結局、サファイヤの文鎮しか守ってやることができなかった。

「北の大砦の責任者はだれでした？　いますぐ呼び戻して宮城門の上で歌わせてあげましょう。大丈夫、私は常々失職したら首切り役人になるうと思っていましたから、痛い思いはさせませんよ」

「とりあえず落ち着け、コーキ！」

宮城門の上で歌う、といえば、斬首刑に処せられる罪人の最期の言葉を聞くという意味にほかならない。

扉の向こうから、メイ、と気遣わしげな声がかかった。夜間警備の赤豹騎士だ。あれだけの轟音を聞けばだれでも驚いて飛び込んでくるところだが、この部屋にはいまコーキがいる。黒竜騎士が指先を弾けば、侵入者の首など刹那の内に軽く飛ばせる。無論、家具の一つくらい簡単に粉碎できるのだ。

「ああ、なんでもない！」

思わず口走れば、コーキの吹雪より冷たい視線がキンと頬に突き刺さる。そうだ、確かになんでもないことなど、後になれば丸わかりだ。その場しのぎの安い誤魔化しだ。だがおまえにだけはそんな目で見られたくない、と抗議する勇氣は、メイの中から売り切れていた。

ふん、とばかりに鼻を鳴らした筆頭殿は、メイが死守を誓ったものの無残に落下した酒瓶には目もくれず、キャビネットから新しいものを取り出すと、親指一本でコルク栓を吹き飛ばすなり豪快におった。天井に尻が向くほど傾けられたそれは、みるみるうちに水面を下げていく。

メイはため息混じりに舌打ちした。この際、コーキの気持ちはよくわかる。遠く熱帯の藩王国イデアラから、大枚はたいて仕入れた机をゴミにされてもゆるせる程度には。

銀狼騎士は決して無能ではない。北の大砦は最前線だ、特に優秀な連中ばかりで編成した部隊を送っている。その下の警備隊もよく訓練されているし、バルファイ軍の特異性も熟知しているはずだった。

その彼らが出し抜かれたことにすら気づかず、シュツツエが裏情報として密告してくる。

「……物理的な防備では限界か」

まるで己の能力不足を衝かれたような口惜しさが、つぶやきに隠せなかった。

「いえ。むしろバルファイの動きに二つの系統がある、それが明確になったということでしょう」

一つでも収穫があったと思わなければやってられない、そんな憤懣を声ににじませ真横に立つコーキを、メイは気だるく見上げた。薄茶の瞳をまっすぐ前に向け、背後で手を組む姿勢は考え事をする彼の癖だ。その手に酒瓶が握られていることはあえて無視する。

「バルファイは十年前——ネーナ嬢がバルファイから連れ出されたのと同じくして、国境に軍を展開させました。それきり動く気配も見せなかったものが、ここに来て急に魔導的な方法でトランテイア国内への侵入を果たす。が、バルファイの魔術師は一時全滅したとされており、それを新たに育成する機能は現在も壊滅的な状態です」

バルファイ各地の塔は王が代替わりする度に粛清され、生贄のように魔術師たちが虐殺された歴史を持つ。そして、おそらくはダーレンがバルファイ国内で動いたことが原因であろう大虐殺で、完全に根を絶たれたとメイは考えている。

しかし、たとえ塔や「普通の」魔術師が存在しなくとも、魔導士は絶対にいる——自分の持つ常識に照らし合わせて、メイにはその確信があった。

魔術師の多くは「循環型」と呼ばれる魔導力を持っている。一般人にはとても観念的で理解しにくい話だが、大まかにいって、己の内から湧く魔導力が体内で循環しているだけなのだそうだ。魔導式を使っても、せいぜいが魔法界の上っ面に流して戻す程度しかできない「閉じた」力なのだという。

しかしごく稀に、数千人に一人か二人の割合で「放散型」として区別される魔導力を持つ者が生まれる。文字通り力が外に向けて解

放されようとする体質で、だから魔導式を具現化して攻撃の手段に転化できる魔導士は全員が放散型魔導力の保持者であり、魔導士の絶対条件である。つまり武器に式を乗せて撃ち出す魔剣士も魔導士の一種で、「魔術師」という括りの中で区別されているだけだ。

ただ、魔術師になるかどうかを選択できる循環型とちがい、放散型には魔導士になることでしか生きられない事情があった。

魔導士が総じて優秀なのは、幼いころから厳しい訓練を積んでいるためだ。目的は、その能力が外に漏れ出すことによって生じる様々な問題を、完全に制御すること。

最も深刻な例は、出口を見つけられなかった力が体内に蓄積された末に起きる。早期の段階で微熱と倦怠感が続き、ややすると周囲のものが手も触れられずに壊れ始める。それを放置しておく、やがて体内で膨れ上がった魔導力が一気に解放され、爆散する。

式を用いて毎日少しずつ解放すればすむことなのに、周知徹底のされない地方の小村などでは、これが原因で子どもが家を吹き飛ばしてしまうという事故が時折起きた。大抵は我が子が値千金の稀少な能力者であると知らず、原因不明の病と思い込んで献身的な看護をしている父母が、爆発に巻き込まれて命を落とすのだ。

後に偉大な魔導士として名を残した者の多くが、家どころか集落一つを壊滅させて自分の魔導力に気づいたという苦い逸話を持っていた。

塔は一般的な魔術師を育成することを大きな目的としているが、卵のうちに魔導士を見つけ出し、不幸な事故を防ぐことにも力を注いでいる。どの国でも、設立には名のある魔導士が尽力するという経緯も無理からぬことだった。

魔導力の型がコントロールできない先天的な資質である以上、たとえばバルファイに塔が存在せず、循環型が教育を受けられずに魔術

師になることができなくても、必ずどこかに放散型魔導力の保持者はいるはずだ。そして地下に潜った先達の手によって導かれ、自他ともに安全に生きていく術——魔導学の知識を身に着ける。それが結果として、新しい魔導士を生むことになるだけのこと。

しかしいまはもう、もし彼らが生き残っていたとしても、バルフアイ王家に従う魔術師は皆無だろう。自らの命を危うくしてまで、一触即発の前線を刺激するような任務を受ける義理も忠誠もあるわけがない。

だからこそ北へ送る部隊は魔術を介入させない、銀狼騎士を始めとした重装歩兵を中心に編成したのだ。戦況を有利にするため白鷹も投入はしたが、実際の戦闘は想定しておらず、プレッシャー要員程度の気持ちだった。都をうつろついで目障りなダーレンの鼠を遠ざける理由が、それくらいしかなかったともいう。

他でもないその白鷹騎士が、侵入者の存在を嗅ぎ取ったというのだから皮肉な話である。

「存在しないはずの王家の魔術師が、我が国きつての魔剣士の張った網を揺らした」

コーキが落とした小さなつぶやきに、メイは目を閉じた。

バルファイに息づく幻。西大陸最古の魔導士たち。国創りの神話に名を刻む、神と人の混血の双子——。

「……真王、か」

その名を口にした瞬間、メイの背を冷たいものがなでた。首に手を回され、自分の命がだれかの気まぐれで奪われてしまいそうな、恐怖に似た錯覚を覚える。

峻峰を連ねる長大な山々を隔てた北の向こうに広がる王国、バルファイ。

かつて魔導力が神の手に成る奇蹟だった時代、その輝ける源として大陸全土に君臨した聖魔法王国。

国都バルフィクスに鎮座するのは三人の王。一人はコーキの言う

婿入りした王で、表舞台にあつては代々揃つて戦好きの暴君だ。真王と記号的な呼称で通るあとの二人は、王宮の奥深くでただ永遠の時を生きるという。

しかしトランティアの周辺諸国は独自の調査を進めた結果、真王実在の確度は低いと踏んだ。王宮最深部にあたる区域には数十年に渡つて人の出入りはなく、真王たちの姿をその目にした者もない。やはり神話の住人だった、というところが現在の定説だ。

ただし、トランティアは異なる見解を捨ててはいなかった。

——真王は、いる。

静まり返つた室内に、沈黙が塵のように降る。それが床まで舞い落ちる前に、メイは頭を振つて無理に口を開いた。

「上等だ。歯車が回り始めたことは百も承知。うちの色男が力任せに回してくれたんだからな」

陽気を装うその声に、腹心の黒竜騎士は調子を合わせて笑つた。

「グラヴィール殿がどういふつもりでネーナ嬢を押さえているのかは、考えてもわかりません。あの方には秘密が多すぎる。ですが彼女が危険な存在であることだけは明白です。ならばこちらは、模索してきた方法を実践に移すだけのこと。幸い、チビすけのでつち上げも見ぬ振りをしてくれたのでしょうか？　ならばさつさとグラハーガへ移送してしまえばよいのです。くれぐれも、グラヴィール殿に悟られぬ内にね」

「だがダーレンはあの娘をこちらの手駒と考えてよい、と暗に示したわけだろう」

でなければファイスの手荒い返礼を受けてすぐ、メイに抗議するなりなんなり、とにかく反発の意思を示しているはずだ。

「ネーナ嬢の身の安全が確保されれば、という暗黙の条件はかわらないでしょう」

「だからあらかじめあいつを組合に送り込んだんだ。昼間は昼間で、真面目に働いて給料までもらっているそうぞ。おかげで寝る暇も

ないと、ぶつぶつ文句を言われる」

「そういえば、彼は昨日闘技会に来ていましたね。組合長の親馬鹿ぶりが手に負えないと言っていました……ご自分も随分とネーナ嬢を甘やかしているようです」

夜間の警護も兼ねて、ダーレンに奪い返されぬようネーナの監視は強化したが、本人の自覚がないままでは危うい。といって、いままさら身近な人間が陰謀と計略のみで自分に近づいたと知るのも哀れだ。

魔術師組合への潜入を命じた彼が、最後までうまくネーナを騙してくればよいな、と、メイはらしからぬ感傷を覚えた。

「……総長殿の報告書を、ざっと流し読みしてきましたが」

は、と息をついて、コーキがようやく本題に入った。彼をしてこれほど覚悟が必要な話題かと思えば、おおよそを察してはいても気鬱が募る。

「バルファイ王家の系図に残っている直系の王族はすべて女性。歴代の王は王女との婚姻を経て即位していました。そして過去逃亡あるいは失踪した王女というのは、意外な数に上ります」

口調を改めたコーキに倣い、メイも椅子の上で居住まいを正した。真つ二つになった机の前では、いかにも格好がつかないが仕方ない。報告書、と一口にいつても、それはここ数十年分をまとめたものだ。噂ばかりが先行するあの国のことは、注意深く時間をかけて探らなくてはならない。

メイは話を促すためにコーキの顔を見た。彼らしからぬ、沈鬱な表情を浮かべていた。

「現王の子は五人姉妹ですが、ある時期前後して三人が行方不明になりました。今回の調査で判明したのはその順番です」

他国人の出仕を拒むバルファイ宮廷、しかも後宮の中で起きた事件や事故は外部に漏れにくい。王女の失踪は大事件なのに、たかが

時期の特定にすらこれだけ手間取るのだ。情報に正確を期すといえ
ば聞こえはよいが、推論を事実にも格上げするためにかかる時間も
つたいない。

「十五年前に第四王女、十六年前に第五王女、そして十八年前の第
二王女。グラヴィール殿が都に帰還したとき、ネーナ嬢は七歳だと
孤児院の院長に語っていますから、第二王女の時期がぁいますね。
ほぼ確定でしょう」

「——そうか……」

そうか、と、メイはもう一度小さくつぶやいて目を閉じた。

栗色に波打つ豊かな髪。褐色の瞳。なにに対抗しているのやら、
小さな身体いっばいで敵愾心を燃やしていた勝気な娘。空色の瞳の
騎士が、命にかえてもと望んだ娘。

ダーレン・グラヴィールは、良くも悪くも目立つ人物だ。素性も
生い立ちも謎だらけでありながら、王婿殿下の昔馴染みにして当時
の宮廷でだれよりも強い影響力を持っていた男。魔導士としての実
力もさることながら、偏屈揃いの白鷹騎士を残らず魅了し——宮廷
を退いてなお支配下に置くカリスマ。

ある日突然トランティアから姿を消し、数年後、少女を抱えて戻
ってきた。

その彼が連れ帰った少女の素性を、王府も手を尽くして探らせた。
結果、二人がバルファイから入国したことだけは判明したが、当時
それ以上のことはなにもわからなかった。ダーレンはただ孤児院に
彼女を預け、以後三年、一切の関わりを絶っている。

「——」
そつと、重い瞼を押し開く。そこにまだ、あの娘がいるような気
がした。

やはり殺しておくべきだったのかもしれない。

ダーレンが彼女との接触を断った三年間、あのときならいくらで

もそうすることができた。だが当時はまだ彼女の身元が明らかでなく、ダーレンの子ではないかという憶測もあり、得体の知れない男への切り札になるなら様子見をしたのが間違いだ。

ファイスをぶん殴ってネーナを孤児院から取り戻したダーレンは、そのまま彼女を魔導学院に押し込んでしまった。あそこは塔とは別の意味で、王家の手出しができない場所だ。ずるずると時間ばかりが過ぎ、最近になってバルファイ王家の影が浮上した。

十八年前失踪した第二王女は、ネーナの母親かもしれない。父親に関する情報は皆無だ。彼女の外見的特徴から推察するにダーレンではないだろうが、それも確かではない。だが父親がだれであっても、母親は第二王女であると、少なくともバルファイは確信している。

メイの思考を補完するように、コーキが口を開いた。

「第二王女は、公に現王の娘です。王孫誘拐の報復行動を旗印に掲げられたら、同盟国の支援も得られません。実状はともかくグラヴィール殿はいまだに王府と深い関わりがあると目されていますし、実際ネーナ嬢の所在を我々は早くからつかんでいました。なにしろ行方不明だった御仁が突如都に現れたばかりか、あのグラヴィール殿が、血相変えて、よりにもよって孤児院に担ぎ込んだ子どもですから」

端々を強調する言葉に、当時を思い出す。宮廷を揺るがす派手な事件だった。

孤児院の支援者であるカーロ子爵のことも随分調べたが、魔導力もないのに、魔導学に必須である古バルファイ語の研究に心血を注ぐ変わり者、ということしかわからなかった。孤児院そのものも、塔や学院との関わりを窺わせる背景はない。

当時からバルファイ軍の行動は不可解だった。しかしなるほど、さらわれた王孫を奪還するために、国境まで出張ってきていたわけ

だ。犯人と王孫の居場所を特定し、トランティアに攻め込むための時期をうかがっている。ことの最初から、話し合いによる平和的解決の道はないと主張し続けていたのだ。

ネーナが誕生したと思われる時期から、バルファイでは魔術師狩が横行し始めた。酸鼻を極めた虐殺の嵐、その標的がネーナを連れたダーレンであつたと考えるなら、王孫誘拐犯として追跡されていたことになる。だがトランティアとの国交が断絶した状態で、軍が真つ当に関を抜けるだけの証拠を提示するには至らなかった。

トランティア領内に逃げ込んでしまえば、ダーレンに怖いものはない。事実、その時点まで彼に猛追していたはずのバルファイ軍は国境で足を止めた。

役者の顔ぶれと状況からして、孤児院に放り込まれた少女が無関係とはどんな阿呆も考えまい。それでもそのころは、彼女の出自についての情報が少なすぎた。

しかし符合する王女の失踪、バルファイ軍がいまもって駐留し続ける現実、あのダーレンが彼女を監視してきた理由。それらを併せて導き出せる答えはひとつ。

ネーナは、謎と悪意に覆われたバルファイ王、その孫だ。

しん、と大気の精まで息をひそめたような静けさが室内を埋め尽くす。

——ダーレン。ダーレン・グラヴィール。

稀代の魔術師にして、殺しても足りない災厄と騒動の源。

実際、彼を殺したところで事態はなんら進展しない。そればかりか真相から一層遠のいてしまう。本当に、心から目障りな男。彼が少しでも、片足のつま先ばかりでもこちらを向いてくれれば、多くの謎が解明されるのに。

ネーナの父親はだれなのか。

なぜダーレンはネーナを伴って帰還したのか。

彼はバルファイでなにをしていたのか。

ネーナの記憶を消しておきながら、素性を完璧に隠さなかったのはなんのためか。

なぜ魔術師組合長の養女という立場を与えたのか。

なぜ、市井に下って以降も白鷹騎士団を掌握していられるのか――

最後の疑問だけは、正解に近かろうという答を持っている。白鷹騎士は一人残らず魔術師だ。その忠誠が正しく向かう先には、女王を飛び越して必ず黒の長がいる。そしてダーレンは、長との間に非常に太いパイプを持っている。つまり長とダーレンが協力関係にあるか、あるいはどちらかがどちらかに依存しているということ。

バルファイ王、ダーレン・グラヴィール、黒の長。だれかが、あるいは複数人が、すべての真相を知っている。

不意に、怒りと苛立ちが占めていた腹から笑いが込み上げてきた。
「ふ——ふふ、ははは」

声を出して笑ったら、いくらか腹がおさまった。視線を感じて顔を上げると、彼の忠実な騎士が神妙な面持ちでこちらを見ていた。

「そんな顔をするな。ヤケになったわけじゃない」

そうだ、ここで自暴自棄になったとて、問題を肩代わりしてくれる者はいない。

メイはもたれていた椅子から身を起こし、たん、と机の残骸を指先で叩いた。

「……バルファイ側が誘拐事件の関係者として、ダーレンとネーナの身柄を確保した場合、即時開戦の見込みは？」

それこそが、メイが抱えた数ある懸念の核だった。ダーレンが引き起こしたであろう事件の結末を、国家間の紛争という形で迎えることなどあつてはならないのだ。

コーキは表情をあらため、顎を引いて即答した。

「王府の分析では四割。ただ総長殿の非公式な見解では、八割強ということでした」

八割——。

怯みそうになる数字を一旦頭の隅に置き、続けて問う。

「ではバルファイ側が、二人の身柄なしに宣戦布告に至るだけの確証を得ている可能性は？」

「状況証拠だけならば十分——同じく、総長殿の見解です。グラヴィール殿が現在も宮廷に大きな影響力を持つといわれるのは、白鷹騎士団のことがあるからでしょう。トランティア発展の原動力に、魔術師の存在を否定することはできません」

つまり数多い魔術師たちが尊崇してやまない黒の塔、そこ最も結びつきの強い白鷹騎士たちを押さえたダーレンは、バルファイから見てもトランティアにとって重要人物であると映るのだ。

バルファイの乱暴な論理が通るのなら、トランティア女王は犯

罪者を隠匿し、間接的に王の血筋を冒瀆したことになる。

こうなってくると、シュッツェが洩らした間諜の動向が気懸かりだった。

ネーナはともかく、ダーレンは氏素性を偽って隠れ住んでいるわけではない。ネーナ自身を「証拠」とせずにダーレンの引き渡しを要求するとは思えないが、彼がいまいる場所が悪すぎる。

手の中で酒瓶を弄ぶコーキに、メイは尋ねた。

「もし国境を突破したのが本当に真王のどちらか——あるいは両方だったとしたら、ダーレンにたどり着くまでにどれくらいかかると思う？」

「そうですね……不良魔剣士が確かに国境にいたと最後に報告された時期から計算して、侵入されたのはここひと月以内。都にはとっくに入っているはずですね」

「……じゃあ、あのおっさんに接触した形跡がないのはなぜだ」

「真王の人物像というのが我々の考えたとおりであるのなら、少なくとも西大陸で最も能力の高い魔導士でしょう。しかしその魔導力あるいは結果としての魔法は、現代と異なる基盤の上にあるのではないでしょう」

コーキが考え考え言葉を選んでいるのがわかる。自分も彼も専門家ではない。

魔導学は特殊な分野の学問だが、バルファイの創世神話が過去の出来事を下敷きにした故事であるとなると、真王の魔法は「神の奇蹟」だ。一説によると、古い神々は式の詠唱も展開も必要としなかったという。

トランティア魔導学院で教えているのは、研究に基づいた理論と実践である。体系的にまとめられたのはここ数百年の話でも、神話に比べれば新しい。無論、式のない魔術など存在しない。

「よく『東西の魔導士は相性が悪い』などと言いますし、もしかし

たら新旧の違いでも同じことが言えるのかもしれませんが。思うに、バルファイが魔術師を一時根絶やしにしたことが、いまも後を引いているのではないでしょうか。つまり、カビの生えた魔導ではグラヴィール殿の施した目眩ましが暴けずにいるのです。話し合いの余地なしという強硬姿勢を打ち出すバルファイ軍が、十年もの年月を無駄にした所以でしょう。強気な態度の裏で沈黙を守る、という矛盾が、彼の国にはあまりにそぐわないかと」

確かにバルファイの軍隊は、本来走り出したら止まらない、大量の血を浴びて鎮まる狂戦士のような集団だ。

「要はネーナにも同じ目眩ましが施されていて、だから二人を発見できないということか？」

重ねて問うと、コーキは考えるように目を伏せ、顎先を彼に向けた。

「門外漢ですので確たることは言えませんが。いずれにせよネーナ嬢には、いま見えている以上の秘密があることは間違いありません」それはそうだろう。あのダーレンが、たとえ王族の血をひいているとしても、ただそれだけの少女を拉致するわけがないのだ。

ただ現状判明している限りでは彼にかかる嫌疑は王孫誘拐であり、それはバルファイにとって十分、諸国にトランティア侵攻を黙認させうるお題目だ。ネーナの両親の所在も不明であるところから、その生死に関わる疑惑も消えない。もしバルファイ側が過去を探り、王女の死に確証を得るような事態になれば、ダーレンは王女殺害ならびに王孫誘拐の容疑者となり、罪一等増す結果になる。

しかし一連の事件が真実ダーレンの仕業だとして、動機がまったくわからない。あらゆる手段を講じて調べてもわからないことだらけなのに、時間だけは刻一刻と過ぎていくのだ。

メイは組んだ脚に肘をつき、顎を支えた。

この件に関して女王は表面上――水面下でなにをしているかはと

もかく——静観の構えだし、ダーレンは黙秘という形で体よくすつとぼけている。いずれもただ一点、確たる証拠がない故によって。しかしバルファイがそれで納得するわけもなく、現に国境は間諜の侵入をゆるした。ならば自分がどうにかして、この危機的状況を回避しなくてはならないのだ。

もし二人の身柄を確保することなくバルファイが仕掛けてきたなら、トランティア最大の友好国である東の隣国アランティスは、不穏な気配を察知してすぐさま援軍を差し向けてくれるだろう。

バルファイを挟んださらに北には利に敏いダリトスが控え、その東には好戦的な民族で知られるディンカセドナも控えている。いずれもトランティアとの関係は良好で、バルファイは苦況に立たされるだろう。

だが騎士団はともかく、トランティア国王軍は数十年ですっかり鈍って平和ボケしている。民らも同様だ。白鷹を動かせば負けはなかるうが、こちらから打って出るわけにいかない限り、バルファイ軍の第一波に直撃された土地は悲惨なことになるだろう。

簡単に解決する方法もある。だが——。

「私はどんな策も捨てていませんよ？」

心を読まれたようなタイミングの言葉に、メイははっと顔を上げた。こちらに横顔を見せるコーキはあくまで優雅に酒瓶から酒をおり、唇をぬぐった指先に舌を這わせる。

「二人を始末し、なにも知らないと言い張るのが一番手っ取り早い。死体を隠せば、いかに疑わしくともそれまでです」

「コーキ——」

「単に戦を回避するだけなら、ですよ。弊害のほうかはるかに多いいまの状況では、その方法を選択することはできません」

だが捨てもしない。そして実行するとしたら、彼自らがダーレンとネーナの首を狩りに赴くのだろう。

「なにより、あの方を討てば白鷹騎士団を向こうに回す覚悟が必要

になるでしょう」

「……あいつらに足元を窺われるかと思うと、ぞつとしないな」

魔導士二人の瞬間的な戦闘力は、一個連隊に換算できる。たった二人で、二千五百人分の働きをするのだ。

白鷹の魔導士はいま——七人。魔剣士を含めれば十一人。それに魔術でサポートする騎士たちを加えて、騎士団としては百人を超えてくる。

メイは音高く舌打ちした。

いかにダーレンが稀代の魔導士といえど生身の人間であるからには、殺せば死ぬのだろう。それこそ年老い、騎士団を退いて杖を失った彼など黒竜騎士の相手ではない。

しかしダーレンが王権を無視した暴挙を繰り返しても五体満足でいられるのは、白鷹騎士団が彼に心酔しきっているからだ。暗殺を試みたところで、ラズロが張りつかせている白鷹に阻止されるだろう。いくら黒竜騎士の身体能力がずば抜けていようとも、彼らは最後の最後、白鷹騎士に負けるかもしれない事情がある。

初期の塔を掌握できなかった数百年前から、いつだって白鷹騎士団は歴代女王の頭痛の種だった。

「グラヴィール殿は厄介な御仁です。もしもネーナ嬢があの方の急所であるのなら、それだけで生かしておく価値がある」

平然と惨いことを口にしながら、コーキは顎をなでさする。

口惜しいことに、小娘一人の存在に付け込まねばならないほど、ダーレンの呪縛はきつく白鷹騎士団に絡みついている。

逆に白鷹さえ取り戻せれば、ネーナもダーレンも用済み。

コーキの言葉は詭弁だ。

「……そういえば、総長殿がおもしろいことをおっしゃっていましたよ」

ふとコーキが声を上げ、おもしろいという割りに複雑な表情を見

せた。

「バルファイ王家には主神の力が継承され、どこにいてもその血は惹き合うのだそうです。バルファイ軍がグラヴィール殿を正確に追尾することが可能だった、そして王女あるいは王孫を間違いない確信と確信した理由です。それから、ネーナ嬢が孤児院に入れられた当初、廃人同様だったというファイスの証言から察するに、グラヴィール殿が封じたものは、厳密には彼女の記憶ではなく過去そのものだったのだろう、と」

前半はなるほど、いかにもお伽噺の国らしくありそうな話だ。

しかし——過去そのものを封じる、とは。

メイはぐつと眉根を寄せた。

「そんなことが可能か？ いや神の力云々からして胡散臭いが」

「私はあり得ると思いますよ。同一王家による統治歴は、東西大陸を通じてバルファイが断トツです。七百年を誇る我が国でさえ足元にも及ばない。ここ数百年、あれほど国が乱れてもまだ続いているところを見ると、なにがしかの加護はあっても不思議ではないでしょう。女兒しか生まれない王家という触れ込みには、呪いの存在すら感じますよ」

「では過去を封じるというのは？」

「そのあたりの解説は魔導学の専門家を頼るべきでしょうね。ただ、グラヴィール殿と黒の長がそういう意味で繋がっているのなら、不可能ではありません。魔導の領域において、あのお二方が組んで叶わないことなどないんですよ」

きつとコーキの言うとおりなのだろう。

昔、ダーレンが戯れに城の一部を吹き飛ばしたことを思い出す。

重積した式を呼び出す、優美な動作。記名され解放された式の起動部が白磁の杖の先で収斂して青く発光し、徐々に膨れ上がる。攻

撃態勢に移る展開部で光は鋼鉄に似た銀色を帯び始め、体積を増した光球が大気を震わせて――。

「……………」

メイは軽く首を振り、ぽかんと口を開けて一部始終を見守っただけの、屈辱的なまでに間抜けな自分の残像を追い払う。

魔導士の魔法というのは、すべての魔導学を包括した式と解で成立する。あれだけ緻密で巨大な式を練り上げ、支え、撃ち出す力を持ったダーレンは正しくトランティア魔術師の頂点にあったのだ。実践に出ない長に次いで、か。

忌々しかった。いつも、どんなときも。

魔導力を一切持たない――いや、確かに持っているのに使えない彼には、この世で一番魔術師という生き物が理解不能で鬱陶しい。いつそ妬ましいといってもよかった。

「そんなに突き詰めて悩む必要はありませんよ」

眉を寄せて沈黙するメイを誤解したか、コーキがいたわるように口調をやわらげた。

「国の発展を担っているのは魔術師ですが、根底を支えているのは民衆です。いざとなれば、白鷹ごときグラヴィール殿にくれておやりなさい。あの方がおつ死ぬまでの何年かのことですよ」

「……そう、かもな」

憂鬱に嵌りかけたメイは彼に感謝したが、コーキはちらりと一瞥をくれ、澄まし顔で唐突に急所を突いてきた。

「時にダラハーガの賢者殿はお元気ですか？」

その質問の形をとった奇襲に、心臓が派手に跳ね上がる。背骨に怖気が這い、掌まで一気に嫌な汗が噴き出した。

「け、賢者っ？」

「ええ。一度あの方と、直接、じっくり、お話をする機会を持ちたいと常々思っているのですが」

「ち、直接っ？」

声を裏返して挙動不審になるメイを、コーキが世にも冷淡な眼で見ている。しまった冷静にならねば、と思うほどに、落ち着いて座っていることすらできなくなった。

「そうだな、そう、いやしかしその必要はない——こともないかもしれない！」

立ち上がりかけた肩を、コーキの手がぽんと叩く。そのまま力いっぱい握りしめられ、冷や汗が首筋に流れた。

「おやどうしました、顔色が悪いですよ。ネーナ嬢をグラヴィール殿からすらも隠しおおせる方法がある、とおっしゃったのは賢者殿でしょう。それがゆえのダラハーガ行きでしたよね？」

「ああ……なんだ、その話が……」

「それ以外、なにがあるというんです。——ああ」

腰を屈めて耳元で囁くコーキの声は氷を吹いたように冷たく、ぞくぞくと寒気がとまらない。

「たとえば、賢者殿のベッドの寝心地について、とか？」

その目一杯含みのある言葉で、すべてバレていることを悟った。

「な、なんで知っ——」

「なぜでしょうね？ 私は意外となんでも知っています。ちなみに賢者殿の昔の男も知っていますよ」

声のトーンが下がった。

忘れるな、とコーキの放つ気配が言っている。

「……俺を責めているのか。大儀にかこつけて恋敵を始末した、卑怯者だと」

「いいえ？ それは結果論に過ぎません。ただ賢者の称号を授けるのは王家ですが、選抜と指名は塔の仕事です。過去をどう消化したのかはともかく、彼女はあくまで向こう側の人間、それを忘れておられるのでは、と思っただけですよ」

ずっと身を起こしたコーキは、大仰にため息をついて張り詰めた空気を払った。

「もっと適当な相手がいるでしょうに。ファイスといい、あなたといい、どうしてそうややこしいことをするんです」

片眉を上げ、斜めに見下ろしてくる眼は遠慮のない軽蔑を浮かべている。メイはぐつと言葉に詰まり、ふんと顎をそらした。

「俺があつちでなにをしようとか、俺の勝手だ！」

いたたまれずに怒鳴ると、コーキの視線がさらに温度を失う。

「本音が出ましたね。すぐにダラハーガの黒竜に連絡して、あちらの身体を海に沈めさせましょうか」

「ユハたちとはとかく、英々を突破するのは至難の業だぞ」

「簡単ですよ。あの魔導士は賢者殿の保護者気取りですからね、手をつけられたとチクってやれば——」

「おい待て！ 落ち着け！」

そうだ、落ち着け。国の大事について思案していたというのに、いつの間に己の下半身の問題に摩り替わっているというのだ。

メイは握った拳をふるわせて反撃の論を練ったが、そんなものが咄嗟に捻り出せたら最初からこんなことにはなっていない。癖の強い前髪の隙間から盗み見ると、コーキは腕組みをして半目で彼を見ている。どんな申し開きも鼻先であしらう気満々だ。

よろしい——敵前逃亡上等だ。

メイはおもむろに席を立ち、机の残骸に手を着いて跳び越え、先ほどまでファイスが陣取っていた長椅子に跳び込んだ。

「あつ！ ちよつとお待ちなさい！」

意図に気づいたコーキがあわてたように声を上げたが、時既に遅し。

メイは椅子から落ちないように素早く身体を横たえ、目を閉じ、暗闇へと意識を投じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7658p/>

魔術師組合

2011年7月22日18時34分発行